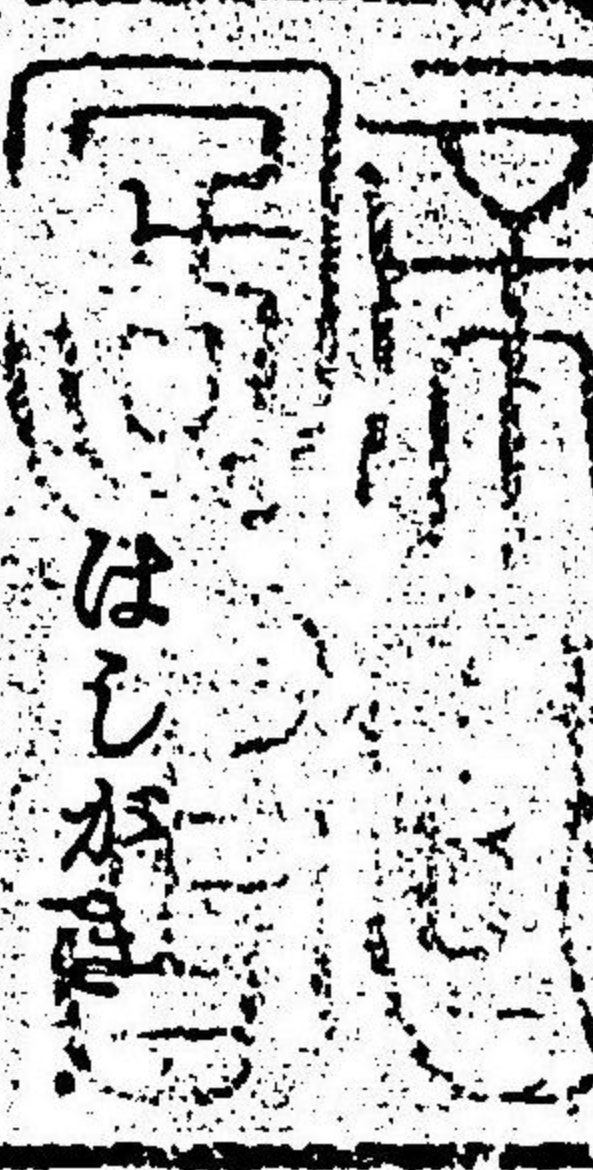


米風歐雲錄





# 米風歐書録



松本君平 著



時剛此初夏に際す、爛熳たる  
 懐に黯然たるなきを得んや。然りと雖ども、男兒生れて凌霄の志を抱く、未だ酬ゆる  
 に由なくして、却て米風の吹く處、歐雲の霞く邊、漫に異境絶域に放浪す、而かも向  
 斯一片歌々望を思ふの念、寤寐も忘るゝ能はず。蓋し斯行、更に大に盡す所あるを期  
 すれば也。

吾輩徒らに西歐皮相の文明に心酔するものならんや、然れども、世界文明の大潮流に投  
 じ國民的生存競争の大途に驅逐し、坤輿上に國を建つるの道を求めんには即ち必ずや



十九世紀文化の真相を觀し、古往今來、國家の榮枯消長する所以、國家の隆替興亡する所以を究めざるべからず、此行吾輩が潜心して研一鑽番すべき問題豈に他あらんや、儼し夫れ世界的大眼孔を以て觀じ來れば彼の東歐希土の戰雲の如き、卽位六十年の祝祭の如き、固と是れ蝸牛角上の成敗利鈍のみ、槐安園裡の一榮華のみ、吾輩深く關心するに非る處也。

\* \* \* \* \*

### 太平洋航海の徒然

幾多の名譽ある政治家を乗せたる、『印度の女王』<sup>エンプレス・オブ・インディア</sup>號は五月七日正午軟風恬波の間に横濱港を解纜して、英領加奈陀の港バンクーバーに向て進行せり。

伊藤侯の一行を初めとして英國公使サトウ氏、具翁前内閣の遞信大臣モーレー氏、英國の貴族二名、其他百餘人知名の船客を以て飾られたる『印度』號は當に無上の光榮を感ずるべし。

聞く『火曜日に出帆せる船は水難の』とは、西洋航海通の忌む處なりと、然るに今

此の『印度の女王』は火曜日を以て其航路に上りたり、迷信乎、迷信乎、吾輩之を知らず、即ち之を知らずと雖も其日の暮方より、海上は次第に荒れ初めたり、風烈しく波大に、船体の動搖は次第に高まり、不意を襲れたる船客、多くは船暈を感じて船室より引き籠れり、是の如くあること四五日、『印度』號は次第に進航して、太平洋遠く乗り出せり。終日終夜、見るものは蒼々たる長天と、漫々たる海水のみ、聴くものは狂麟の櫓に嘯く聲と、怒濤の甲板を洗ふ音のみ。

日を経る裡に海上波漸く穩かにして、甲板上男女の喜々たる聲を聞くに至りぬ、永き航海は迄、單調なるものはなし、總ての王土は甲板の上に限られ、總ての人口は百餘人に過ぎず、總ての快樂、總ての苦痛皆此の、狭小なる王土の境界を出る能はず、朝夕相見る處の顔は、一樣の顔色、踏む處の地は一樣の甲板、空中を翔る一羽の鳥、波間に躍る一尾の魚も、皆な是れ談話の新種子ならぬはなし。水天勞瘁の間に、隱見する北海の孤島を認むれば、船中狂するが如く、嗚！島！と叫ぶ聲は松の隅より隅に響き渡りて、甲談じ乙語り、半日を費すこともあり。



船中には夫を失ふて故園に歸る寡婦もあり、妻を戀ふて遠く旅路に向ふ夫もあり、新婚のホネー、ムーンもあり、世界の快樂を尋ねて廻る漫遊ワンダラーもあり、功名に志して異郷に赴く志士もあり、種々雑多の人種に依て組織せらるゝ此の洋上の一浮國、塵世の來往交通と隔離したる此の小さき別世界は、社會學者が數千年來頭腦を疾しめて、社會組織を講究せしものにも適かに、勝りたる摸型とす。若しも此の世に、最も小き最も平和なる共和的社會の存在せるものありとせば、是ぞ即ち此の『印度の女王』號なり。

船中よて喫煙室スモーカーと、圖書室ライブラリーとは、共に船客に快樂を供する二個の公共室なり、閑適の際に於ける讀書は何よりも愉快を覺ゆ、叢談雜誌に花を咲かすは喫煙室よぞある、終日圖書室に入りて讀書よ餘念なく、知らず識らず華胥の境に遊ぶ文人あれば、喫煙室にシガーを燻らし、コクテールに酔ふて、高談放笑、四筵を驚かす、豪客もあり、六時の晚餐を喫して後、幾多の船客は思ひひに手を携へて、甲板を縦横左右に運動するを常とす、而して八時頃に至れば、洒落の船客多くは喫煙室に群がり入りて、酒店

の開くを待ちかねて、友を呼びつゝ、巨觥を滿引し杯數の重なるも随ひ漸く笑聲の高まるを聞くも可笑し。

讀者よ喫煙室の一隅に、幾多の日本人は黄色の顔を鳩めて、快談戯話に耽ると知るべし、流石に白人も此の一隅へ混入雜居するを憚りしが、果ては日本船客の占有する處となりぬ。乃ち余は此一隅を船中の日本村と名けたり。

夜更けて各室の電燈も消る、人聲も闕寂くわつじやくと歸し、船客皆眠り入り、唯太平洋の波濤船舷を洗ふ音の聞ゆる時も、此室ばかりは電燈煌煌として、笑聲醉語湧くが如し。

船中の生涯は單調なりとは云へ、無味なりとは云へ、亦自から一種の趣なきには非らず、僚たる俊人劉たる佳人、船中其人に乏しからず、是と坐を共にし娓娓として説き、喃喃として話す、亦以て洋上の閑日月を送るも足るべし。

讀者は定めて春畝侯が此の航海かいかいも如何なる生涯を送り給ひしかを知らんと欲するなるべし。太平洋上に於ける侯の生涯は、甚だ簡易かんえいにして、洒落なり、社交的なり、讀者よ侯の船室は甲板上の船員の一室を給せられたるものにして廣さ僅かに二疊半に過ぎず、



此の中に寢臺あり、机あり、而かも其中には二個の大打金と、雜多の物品を混入す、其窮屈なる、眞に膝を容るゝに過ぎざる程あるは、侯は朝夕優然として此間に起臥すること々記し、唯ふに『印度女王』號の一小船室は永く侯の名譽と共に残るなるべし。侯閑あれ携ふる處のベーコンの文集、ウイルクソンンのネーションス、アエーキングカンニンガムのモルダン、シビリゼーション等の書を繕き、倦めば則ち甲板を逍遙し、洋客と手を携へて笑談自若たり、或時は喫煙室の日本村へ入て青年を相手に遊戯し、時に或は船室へ入て、往年の歴史を談じ、或は列國の形勢を論じ、哲學談に、政治談に、經濟談も、一上一下、縦辯横説、夜の更るも忘るゝこと屢あり、蓋し侯の如く博観を有する人は、常代稀に見る處也。

\* \* \*

### 船中の歡會

文明の民は快樂に耽るの八種なり、渠等は快樂の爲めに活き、快樂の爲めは死す、一日快樂無き時は、渠等は無涯の苦惱を感ず、故に渠等は茫々たる沙漠の上へ於ても、漫々たる大洋風濤の裡に於ても、快樂を貪る固有の天性と離るゝこと能はざる也。太平洋の航海も早や己に半を過ぎたり、船客も船に慣れてや、快樂を思ふの念轉切なり。此際船客中の英國一僧侶に依て、音樂會は催されたり。入場料は一弗にして、其目的たる慈善の爲め英國水夫協會に寄附するものなりと謂ふ。今しも船中の無聊な堪へざる善男善女、否な寧ろ快樂に戀ひ戀はるゝ、幾多の才子佳人は、音樂會の催しありと聞くと皆々嬉々として悦び合へり。標致自慢の令嬢達や、音聲自慢の紳士達は、我先と出、其夜の役となれり、發起人余にも何か一役勤めよと勧めしが、其夜氣分悪ければ辞したり、友人鶯溪氏は役者の選に入り、一場の役目を勤めて喝采を得たり。會場は食堂を以て之に當て夜九時に開會せられぬ、下手な



## 婦人の競争

歌や、下らぬ音楽迄も、船中にては遠かに耳新しう覺へたりき。

音楽會のありし翌々日は、又諸種の競争行はれたり。是れ實に航海中の花とも評すべきもの、此の競争に於ける會員は二弗以上若くは物品を寄贈するの定なり。當日は余も意氣快適を覺るしかば競争に加はれり。却て競争には種々あり、其の中最も面白しと感ぜられたるものは馬鈴薯競争と稱するものにてありき。此の競争は、五十ヤードの距離に三列に切りたる、馬鈴薯を并べ一列に凡そ六七個を置き競争者三人を並立せしめ、號令と共に走りて甲板の馬鈴薯を一々拾ひ取り返りて、出立點に置ける函の中に入れ、早く拾ひ盡したるものを勝者となす方法にして會員より醜集したる金圓若くは物品を賞與として勝者に與るなりけり。

妙齡の佳人も、半白の老婆も、皆な諸共に競争場裡に入交りて、輸贏を争ふ態、流石に歐洲の婦人は、快活にして感心の外なし。號令の下に、韓紅みの薔薇の花を冠せる

三五の乙女や、白毛頭の年寄婆が形を構はず一齊に駈出し、馬鈴薯を拾ひては返り返りては拾ひ、狼狽途端に、靴のすべりて仰向に堂と倒るゝあり、横さまに轉ひて大きな腰を痛く打ち盛める顔の面白さ!!!、氣の毒さ!!!、可笑さ!!!一場の戯劇を見るの心地して、満船哄笑、大洋の潮の湧くかど怪しなれぬ。

此日幾組の競争行はれたりしが、最後に『印度女王號』船員の細引ありたり。

此日伊藤侯は貴婦人競争の勝者にとて、金時繪の漆器の函を寄附せられたり、其の價凡そ二百圓位のものなり。然るに此の寄贈物に對して、八ヶ間敷議論は起れり。其故は年若き婦人などは、如何よもして競争に勝を占めて、此の賞譽と與からんと熱心せざるものなきが故に、自分の競争に勝を得るの望みある競争の方法を申出し、隨て異論者紛出し、委員も亦價高き侯の寄贈物を、無意味に奪ひ去られんことを恐れて、最も適當なる競争の方法を發見せんが爲めに、侯の寄附せられたる賞品に對する競争は、遂に延引せらるゝこととなり該賞品は圖書室の入口に供へ置きたり。

『印度の女王』號は追々進行して、長しと思ひし太平洋の船路も早や三日となりけり。



其日は午后より風強く吹きたりしが、夜は舞踏會の催しあり、夕暮より甲板の片側は、周圍布を以て繞らし海上の風波の爲めに襲はれざる様に注意し、其上をば各國の國旗を以て隈なく飾り付け、ピアノの音樂洋々として起れば幾多の男女は、興に乗じて踊り出せり。斯くして此夜は果て、明くれば航海も最後の二日となれり。

此日余は日本の友人に送る書狀を認めて、多くの時間を費せり。

最後の一日は遂に來れり。待ちに待ちたる最後の一日は愈々來れり。此日は伊藤侯の寄贈せられたる賞與品に關する競争を行ふこととなれり。之より先き委員等は意を凝らし、競争の方法を講じ、彼是利害を論究したりしに結極五十餘種の競争方法を申出すに至れり。

船中の青年男子は、何人も一樣に其の貴重なる賞與品が、年少さ而かも麗はしき女子の手に落ちんことを希望せざるはなし。

競争の性質より、若し智識を要する競争なれば中原の鹿、或は醜き年老ひたる梅干婆の手に入るの恐あり。是れ願ふ處に非ず、さらばとて若し体力のみに依れる競争な

れば、疑もなく勝は脛長く骨格逞ましき、鬼を欺く如き或る婦人の得る處たらん。是れ亦た願はしき事に非ず、然るに美婦人に得させたしと思ふ人こそ、多ければ、偕てこそ競争の方法は甚はた困難となりたるなれ、美人の潜勢力の恐ろしさよ!!

左れば委員等は最後に一決して、智識体力共に結合したる競争こそ最も然るべけれど、茲に一の面白き競争を發明したり。うは智力に依て体力に依て、競争せんと欲するもの、意旨を、彼此參酌せしものにして、其の方法は各婦人の競争者をして、一の密封書を持たしめ、五十ヤードの距離を走らしめ其處にて、密封書を開き、封中の紙片には加減乗除位の簡易なる算術問題あり。之れを正算して而して最も早く持ちて出立せし點に歸りたるものを、勝者とする方法なりとす。

此の競争に現はれし婦人は十三人あり。其の中には若きもあり、年老ひたるもあり、年少の美人が競争に敗れたるを見て、落膽する人もあり、半白の老婦人が勝ちしと聞きて恐るゝ人もあり、斯くて最後の勝利者<sup>チャンピオン</sup>と定むべき婦人三人の競争とはなれり。一人は無鹽的の老婦人、一人は年紀二十三四位の婦人、一人は嬌齡僅かに三五に過ぎず、



下げ髪したる童女なりけり。其他の姿容勝れし多くの婦人は、大抵皆敗北せしなり、此の童女さまで可憐といふにあらねども、年若き丈、船客の同情は自から彼の上に集まりしが如し、斯くて最後婦人勝利者競争の結果は、遂に此の童女の勝となり、中原の鹿は彼の手に落ちたり、抑も此の年若き乙女とは誰ぞ、二十八年來日本に客となり、嘗て同志社の教授たりしグリーン博士の令嬢なりけり。

其日の暮に競争行賞は實施せられたり、英國公使は各競争勝者に對し、手づから賞品を渡し、春畝侯は其寄附賞品を手づから、グリーン嬢に授與されたり。此際喝采の聲は海面に轟き渡れり、最後に船客皆な侯の萬歳を三呼して散せり。

明朝五時、船はビクトリアに着する豫定なるに由り、船客は行李の整理も忙はしく寝ざる人も多かりき余と、鶯溪氏とは同室ゆる、其夜は四方八方の物語り、過ぎ越し方、行末の事ども語合ふ中、東天は早や白めり、いざ是より一睡せんとそのまゝ横臥すれば、間もなく『起きよ！起きよ！船は着きたり』と英語にて余等と呼び醒すものある故、何人ぞやと思へば、其人は春畝侯よてありき。直ちに起きて甲板に出づれば天

色滯朗、山碧にして水白く、十四日間渺漫たる大洋に、雲と水とのみを見て暮せし吾等の目には、萬象盡く春ならざるはなく、宛がら天國に入るの想あり。

朝猶早ければ、甲板には多くの人も見えず、宿醉未だ醒めずして管を捲く男もあり、昨夜着たま、なる燕尾服を隠さんとして俄かに外套を纏ふ紳士もあり、余等登起し連、否な徹夜連六七名、食堂に鳩まり茶などを命じて談話會を開けり、中には英國の判事某あり、豪商某あり、海軍士官某あり、陸軍大將の息某あり、饒舌滔々、哄笑湧くが如く、中にも判事某は口を極めて春畝侯の謙徳を歎稱し、侯の令名は千載不朽ちざるべし、斯る大政治家と手を一室に把て歡晤するを得る、小官の愉快と、名譽とは譬ふるに物なしきと述べれば、侯は傍より微笑しながら否、否、敢て當らずと應答するなど面白し、

談話の間、余の年齢に就て會上一の疑問は起れり、或人は余が年廿三なりと云ひ、或は廿四なりと云ひ、多數は廿五以上ならずとせしに、一人日本通の洋客は、余を以て廿九なりと云ひ、竟に一場の論戦となり、洋客の通辯として金を賭して余の年齢



を争ふに至れり、坐中の三人は廿五歳以下なりとし、一人は廿九歳以上なりとし、奴  
々囂々として止まず、余の曰く諸君皆な當らず、余は廿五歳以下にもあらず、亦た廿  
九歳以上もあらずと、渠等猶ほ強て余の齡を問ふて止まず、余の曰く諸君若し余の  
言を疑は、請ふ去て船中の美人に問へ、彼は能く諸君に其齡を語らんと、満坐  
絶倒一掃賭戯遂に止む、

### 晚香坡の日本領事

此朝領事は、『印度女王』號よ來て、伊藤侯を迎ふ斡旋最も力む。

領事の云ふ所を聞くは、近頃加奈陀地方は於て排日本人熱盛に起り、労働問題よりして  
轉じて政黨の問題となり、更に一進して立法院の問題となれり、蓋し西部加奈陀人が  
日本人に對して有せる感觸は、甚だ佳ならず、是れ必ずしも加奈陀人の罪に非ず、從  
來日本人が加奈陀人に善良なる感觸を興ふべき手段を欠きたればあり、即ち在加奈陀  
日本人が同國人に向つて興ふべき感觸は、下等労働者、卑劣、不徳、不潔、貧窶等の

惡徳のみ、隨て彼等が日本人を見ること益も支那人に異ならず、否寧ろ支那人よりも  
更に恐ろしき、而かも同一の惡徳を有する人種なりと信するもの多きに至れり、支那  
人と同一階級に屬すべき人種と信せらるゝか故に、支那人排斥運動の企てらるゝ毎  
に日本人も亦た隨伴するに至るは、是非も亦次第と云ふべし。

此地にある日本人は多くは、皆下等労働者に過ぎず、有力の商人も少なく、亦た知名  
の日本紳士にして此地に遊ぶもの稀なるが故に、隨て加奈陀人日本人間に感情の疎  
隔なきを得ず。されば今回伊侯が英國行の途次加奈陀の地に入らるゝは、大よ日本人  
に對する加奈陀人の惡感情を融和するの便あるを疑はずと。

此の日晚香坡クロニクル新聞社員は、伊侯を船中に訪ふて、長時間の談話あり  
しが、

果然翌日のクロニクル新聞は、三頁に渉れる長文の訪問録を掲載したり、『印度の女王』  
號はビクトリア港に留ること大凡十二時間に及べり、ろは支那人檢疫の爲めに抑留せ  
らるるなり、先便の船客の如きは是が爲めに一週間の抑留を受けたりと謂ふ。



其夜十二時ビクトリアを發して、翌朝即ち十九日午前五時晚香坡港に到着す、同七時『印度女王』號中にて最後の朝餐を喫し、船客と最後の告別をなして、余は蔦溪氏と相携ひ從容漫歩して晚香坡ホテルに投宿す。

余幼にして海外に遊學し、十年の洋遊鴻爪を到處の雪泥に印し、今復た一管の毛生を携へて、世界周遊の客となり、米風歐雲の間を跋渉す、宛として賈島并州の思あり、嗟乎、振衣千仞岡、濯足萬里流、丈夫此行、聊會心の快あらん歎。

\* \* \*

### 晚香坡市

太平洋上二週間の航程、恙なく伊藤侯の一行はバンクーバー港に安着し、候は直にバンクーバーホテルに投宿せられたり。同日(五月十九日)加奈陀政府は、候を歡迎する爲め儀仗兵の徵集を命ず。聽て正午の頃に至り儀仗兵は侯の旅館の正面に整列して、劉亮たる軍樂を吹奏せり。

是れ同州政府が日本に向て表する所の好情あるを忘る可からず。

又太平洋鐵道會社長伊藤侯及一行の爲めに、プライベートカー私用汽車を送られたり。是れ亦同會社が日本人に對する懇志たるを記せざるにからず。候の一行は其翌二十日午後二時バンクーバー市を出發するを以て、一日同市に滯留することゝなれり、

余輩は足を同市に容るゝ今回を以て初とすれば、勉めて時間を利用して、同市に關する多くの見聞を爲さんものとバンクーバーホテルに投宿するや否や、直ちに旅館を出で、電氣車に投じ東西に、南北に市中の觀察を試みたり、午後伊藤侯も馬車を驅て市上を巡覽せられたり。

此の夕日本領事館に於て、日本料理の宴を催し余輩も宴末に列せり、山肴海珍卓上に堆かく、恍として郷國の酒樓に遊ぶの想ありき。

晚香坡港は幼稚に屬し、多く談るに足るものなしと雖も、太平洋の彼岸に於ては、桑港を以て同港に及ぶべきものなきを以て、將來益々東洋諸國との貿易交通に偉大の關係を有するに至るべきや疑を容れざるなり、余輩は同市を去るゝ先ち、少しく同市の



光景に就て、讀者に引導することなくして已む能はず。  
抑も同港は、候温にして、背後はオリンピアン山脈を負ひ、北方には海岸に沿ふて峩々たる峯巒の雪を載くあり。パンクーパー島は太平洋面より襲ひ來る烈風を遮蔽し得べく、而かもシヨルシヤ海峽を度る涼風、は夏期の煩熱を掃ふに足るべし。市の兩側はシヨルシヤ海を帶し、地勢海に向つて漸く低く、隨て地質極めて乾燥なり。市の發達と共に市域は將來倍々二方面に向て擴張することを得べし。用水の供給は其た充分にして、乾涸するの患あるを看す。

晚香坡市は、太平洋貿易に於ける加奈陀大陸の咽喉にして、兼て又英國が濠州大陸を控制する唯一の關門たり、其之を地勢より見るも、將之を經濟上より見るも、兵略上より見るも、將來益々英國并に加奈陀諸邦の、要港樞地たるに至るべきは論を俟たずさればこゝ同市は軌新驚くべきの進歩をなせり。而して同市をして此の如き進歩をなせしめたる原因に二あり。曰く太平洋鐵道の全通、曰く太平洋汽船の開航是なり。太平洋鐵道は、今を去る十年前即ち千八百八十七年の五月、初めてモントリールよりの列

車が、晚市に到着せるほどなりしが、同年太平洋鐵道會社は進んで布哇、スバ、フィシ諸島を經過して、晚香坡ビクトリア濠洲に通せる太平洋上の航路を開通せり。是に於て晚香坡は、俄然として市況隆々繁昌に趨むき、太平洋岸の一大樞地となれり。加之晚香坡、日本、支那を聯結せる航路の如きは、北米大陸と、英國との交通貿易を發達進捗せしめ、猶り晚香坡市を潤はすのみならず、又大に加奈陀内地の富源を開發するの動力となれり。殊に晚香坡、日本、支那間の航通に供せられつ、ある三艘の汽船の如きは最も意を用ひたるものにして、印度女王號と云ひ、日本女王號と云ひ、支那女王號と云ふ、皆な是れ鋼鐵の双螺船として、船体構造の堅牢なる、速力の迅快なる、他の太平洋汽船航海力に比して、五日若くは十日の速きを見るべし。布哇、ヒシを通過して濠洲へ航する、發船は毎月一回の定なるが、今や加奈陀政府は進んで太平洋電線を架設せんとするの計畫に着手せり。因て願ふに太平洋に於ける物質的進歩は、將來十年間全く光景を一變するに至る可きあり。

夏期に達すれば晚香坡、及びアラスカ間に毎週航路を開き、以て魚糧の利便を圖り、



冬期に至つては、毎月二回の航通をなせり。而して晚港ビクトリア、ナ、イモ諸港間に於ては、日として航通せざるはなく、ビクトリア港より又たブダットサウンド港場ホートランド港、桑港の諸港に通せり。斯の如くにして太平洋海岸の諸港と晚港とに貿易甚だ頻繁にして、航通日に月に盛んなるものあり。而して太平洋岸内地に於ける諸市府と晚港との交通は、同港の東、四十三哩なるミスシヨン、シヤクシヨン停車場よりしてベロリソングム灣并よりリチシユ、コロンビヤ鐵道と接続し、以て縦横左右にするを得べし。夫れ斯の如くにして晚港は、一方は汽船の便に依り、遠く太平洋にして、太平洋諸國并に濠洲に接し、近くは太平洋海岸の諸港と連接し、内は鐵道の利に依て海岸内地の諸市府と通商を圖るを得、晚港の商利たる亦大ならずや。

ブリチシユ、コロンビヤ等所の山野、森林鬱茂して木材の生産極めて多し。而して、港の發達は最近十年の間にあるが故に、當時の家屋は總て木造ならざるはなかりき、然るに千八百八十六年六月の大火災は、晚港全市を焼き盡して烏有と歸せしめしかば、此に始めて石造煉瓦の家屋を見るに至り、爾來交通機關の伸張に依て、烏有に

歸したる晚港は、灰燼の中より勃焉として崛起し、十年よして以て今日の偉觀を現はせり。製造工業の如き復た大に見るべきものあり。ブリチシユ、コロンビヤ製鐵場、砂糖製精場、石灰製造場等其最たるものとす。晚港は同州木材交易の中心點にして、市内復巨大なる裁木機械場多し。

同市の人口殆ど二万人に達し、支那勞働者の數既に一万に達し、日本人の勞働者亦二千人に及びり聞く處に依れば、是等多くは無賴の漂民にして、一定の職業なく恒産なく、太平洋海岸を喰ひ暴したるものなるが故に、同州に於て屢々日本人排斥運動を試みらるゝも、深く怪しむに足らざるものあり。

市街の大道には電氣車ありて以て交通を使にす、又是よ依て以てフレザー河口に於ける、ニュー、ウエストミンスター市に通ずることを得べし。市中の旅館にて最も壯大なるものを、太平洋鐵道會社に屬するバンクーパー旅館とす、一日(廿四時間)の宿料食料共四弗(即ち我が八圓)にして、一夕の湯沐料一弗なりとす。是等は比較的高價なるをいゆ。一度の靴磨代二十仙に至ては其法外なる驚くべし。







外暗黒にして、亦た観る可からず、唯だ聞く轟々たる百雷の如き、響きは山より山へ谷より谷に傳はりて、物凄きこと云はん方なし、すさまじき列車の走る音にも旅に疲れ、睡りの神は驚かされて熟寝せり、良ありて呼び覺され出で、窓外を眺むれば夜は明け離れたり、日は出でたり、昨日見し風色とは自から一種異なれる山水は猶ほ眼前に横はり、吾が瀟車は世にも名高き北落機の山脈奥く深く進み行くなりけり。春風は雪解けて落ちて流れて行く水や、蜀山の如き奇と叫び怪と唱ふる山は見ざれども、雲に聳ゆる嶮はしき峰や高さ幾千丈とも思はる、峻峯より直下に落とす瀑布や松柏の幾千年も生繋れる晝樹は暗き森林や此等の境を限りなく、打過ぎて吾を乗せたる列車は雲を凌ぎて次第に高く登り行く、而かも大なる瀟關車が前後に三ツ並びて峻坂を推行く様の勇まらしき、往昔は鳥も通はぬと云ひしロスの峰も今は鐵路を架けて、安樂椅子にシガーを薫らしつゝ、氣樂三昧は四方の雲景色を眺めつゝ、難なく越ゆる文明の世の難有さやかてロスの峯も過ぎ行きて落機第一の高峯たるシルキルクを攀ちらんとす、山腹に一停車場ありグラスシアハウスと稱す。

茲には不造の旅客あり、旅客皆列車を下る首を回りして右方を仰ぎ見れば、三角塔の形状を成せる巨大の巖石は、削りたるが如く屹として天空に聳へ、眸を轉して西方を一望すれば、イリシワートの無間の谷を隔て、ロスキの諸峯は、參差として眼晴を映し來たれり。脚下には辿り來りし鐵路透々として、遠く帯を曳くが如く、面前にはシルキルクス大氷原、岌々乎頭を壓して落ちんとす。

旅客皆晚餐を喫し終れば、列車は進行を初めぬ。而かも其速力極めて遅々、牛歩も音ならず、夜九時にして暮色漸く到る。シルキルクを踰へて日全く沈む間は來れり、山色遂に掬す可からず、窓外唯だ明星の煌々たるを觀るのみ。

落機山を横断して、平原に降れば、山河の風色、平々凡々、復た前日の奇觀なし。ドーナルドの停車場を過ぐれば、ブリチシユ、コロンビアの勝景遂に觀る可からず。

列車中に於ける快樂は、讀書と睡眠と、同乗の解語花を相手に、骨牌を弄するも過ぎず斯の如くにして六日の生涯は、益もさく費されたり。

一時間三四十哩を疾行せる瀟車中より、周圍の事態を觀察して、得る處の智識なるも



のは甚だ僅少なり、終日荒蕪たる草原を過ぎては、加奈陀に於ける農業の發達、猶ほ幼稚に屬するを知り、數百哩の間、人影無きを觀ては、人口の尙ほ稀疎なるを察するに過ぎず、而かも幾多の列車に、伊太利の土民を乗せたる、移住民の西部に輸送せるを觀れば、加奈陀政府が、産業發達に力を盡すもの甚だ勤むる處あるを窺知すべし。

オタワ府

オタワ府は加奈陀の首府にして、政府の在る處、太守(ガバーナー、ゼネラル)の駐留する處たり、人口五万を有し、オタワ河とリデュウ河の中間にありて風色頗る佳なり水利の便多きを以て、水力の利用甚だ盛んなり、オタワ河の上流より、木材の流出するもの皆此の地に陸上して、以て各地に材用の供給を計れり。

市府は二部に區分せられ、一を上區と云ひ、一を下區と名く、地位高原にあるを以て一望千里、加奈陀の平原は眼底に落ち來る、市民の居宅住邸、皆莊麗にして閑雅なり、政府の建築物最も莊大を極む、太守の居室はリデュウホールと稱し、市區以外二哩の

處にあり。

首府オタワの加奈陀に於けるは、恰も華盛頓府の米國合衆國に於けるが如く、唯規模大小の差あるのみオタワは加奈陀に於ける政治上の中心にして、商業上の中心點に非ず加奈陀の商業上の中心點は、實にモントリアル府にあり、モントリアル府の加奈陀に於ける地位は、殆ど紐育の米國に於けるが如し、米國、加奈陀兩國の相類似せるもの甚だ多し、盡し米風の感化然らしむる處ある乎。

伊藤侯が此行、加奈陀領を通過せらるゝは、加奈陀政府の大々歡ぶ所として、到る所の新聞盛んに伊侯の來遊を歡迎するの意を表せり。太平洋鐵道會社長は特に伊侯の爲め、其私用の客車を供し、丁寧懇切盡さる所なく、以て侯が羈旅の情を慰めんとを力めたり、侯のオタワ府に着するや、政府は一隊の儀仗兵を停車場に派出し、政府の顯官大凡十五六名亦た停車場に來て伊侯を歡迎せり、此際市民は黒山の如く、停車場に蟻集し、東洋第一の政治家を見んことを争へり、伊藤侯はそれより馴馬に駕して、加奈陀太守の邸宅を訪へり。太守は非常の喜びを以て之れを迎へ、特に伊藤侯の爲めに



會を催し、政府の顯官任野の政治家、紳士淑女雲の如く霞の如く一堂に會し、以て侯の來遊を祝し、熱心に款待せり。同國の太守は年齢既に耳順なるべし、温厚誠實一見して盛徳の君子たるを知る。時正に加奈陀議會の開會中なりしを以て、伊藤侯は案内せられて、議院に於ける議事の景況を視察せられ、後ち議院内の圖書館、議員室なども一見せられたり。伊藤侯の此行たる、固より閑日月あるに非ず、加奈陀太守を訪ふ、國際上の常典、政治家の交誼に過ぎざるのみ。然れども侯の名聲風に四海に馳せ、憲法の草案者新日本の大政治家として、兒童走卒と雖も知らざるものなきはなるが故に、今特に茲郷に入り、來て禮を太守に報ゆるや、太守が侯に酬ゆるの爾く盛んなる所以の者、豈それ偶然ならんや。前路を急ぐ伊藤侯は別れを惜む幾百の人士に告別して、オタワの停車場に歸らんとするや、現内閣の總理大臣ロリエ氏は侯を送て共に停車場に來れり。

此時待ち兼ね顔したる、客車の戸を啓き、侯は之に打乗れり。乗訖るや汽笛一聲、モントリール指して汽車は走れり。其夜の十時汽車は加奈陀第一の都會たる、モントリール府に着せり。而して十時半には早くも讀者は、ウインドノ一旅館の第一階にて晚餐を喫せらるゝ所の伊藤侯を見るべし。

\* \* \* \* \*

紐育新聞記者

凡る新聞の活潑なる、迅速なる、生氣ある、感觸的なる、有益にして亦た有害なるは米國の新聞に如くはなし。新聞記者の大膽なる、奇抜なる、王侯貴人を物ともせざる面の皮の厚きものは、米國の新聞記者に如くはなし。歐洲の政治家は米國新聞記者をヤンキート、新聞記者と稱して、蛇蝎の如く嫌惡するものあり、彼等は天下第一の自由國に生れ、自由自在氣マ、勝手の生涯を營み、ルソー的民約主義の政治空氣を呼吸し、爵祿權勢に屈する所以を知らず、帝王を見ること國民の奴隸と異なるなく、政治家を見ること一個の公人たるに過ぎずと思惟するものなり。世に米國の新聞記者はど厄介なるものはなし、彼等程ゾクしきものもなし。彼等程好奇心に富めるものもなし。紐育河の水中に潜りて、河底の奇觀を新聞に投書して、一世を驚かしたる女新



聞記者あれば、風癲白痴と化して、白日大道を狂走し、警官に捕はれて風癲病院に入り、内部の弊風を暴發して天下の義人を駭かしたる、新聞記者もあり。其奇を好み、快を索むる、天下復此種の人に超ゆるものはあらじ。此の奇々怪々、大膽不敵、輕侮放縱の人種の寄集りたる紐育新聞社は、毎日毎夜、鵜の目鷹の目を睜りて、奇聞の天外より落ち来るを俟つ。苟も紐育外百里以内に来るものあれば、皆彼等の餌食たらざるはなし。ロングフェローは詩人は宇宙の美を喰て活と謳ひしも、此種の新聞記者は、宇宙の奇事を搜して活く、此に知る彼等は奇事怪聞に餓死つゝあること、伊藤侯の名は其他に於て知らるゝが如く、夙に紐育社會に知られたり。殊に日清戦争よりして、侯の名は越童走卒に至る迄知らざる者もなし。世界の三大豪傑の一人なりと、グランド將軍の激賞したる李鴻章の鼻を叩き折りたる、日本一流の政治家として、侯の名は知られざる隈もなし。左れば此人が紐育府に入らんとするや、如何ばかり新聞社會に恐慌を與へたるぞ、恰も飢ゑたる鷹の一群に肉片を投じたるが如し。紐育オールド新聞の如きは、伊藤侯の來らざる前よりして、魁然たる侯の大肖像を紙

上に掲出し、三頁に渉る大記事を載せ各新聞も亦争ふて侯に關する記事を掲げたり。同時に各新聞社は幾多の探訪員を派出して、侯に面晤せんことを求め、侯の旅館は一時新聞探訪員を以て充満したり。然れども侯は既に功名に念なく、又聲譽を天下に走するの志なきもの、如く、頓着せざるなり、然るに各新聞社は、常に侯の旅館の周圍に探訪員を散置し、其の出入毎に其後に微行せしめ、途上に之を摸寫して以て新聞に掲載したり。

ナルドロフ旅館

富の發達の殷阜なる、生計程度の高貴なる、四海の中米國に及ぶものなし、而して米國の豪富、紐育に如くものなし、而して紐育に於ける豪奢はナルドロフ旅館に過るものなし、其家屋の宏壯なる生活の奢侈を極むる、天下第一と稱す。侯一行の旅館は即ち是也、侯の室は同旅館の第一階の東隅あり、此館に館主の最も意を用ゐて築造したる室六個あり、ステート、ルームと稱し尋常一様の旅客は、決し



て此に泊るを容さず。異常の珍客の爲めに設けられたるものなり。ステート、ルームの一室古代室(ヒストリカル、ルーム)の如きは、奈破翁第一世が靠りしと稱する椅子女王マリ、アントネットの寐臺などを安置し、旅客をして此の裡に居らしむ。伊藤侯の取りし室は、ステート、ルームの一室にして、嘗て李鴻章の來りて泊せし際も、同室を取られしと云へり。侯の臥せられし寐牀は、嘗て李中堂が横はりし同一寝牀にしてワルドロフ館に於ける、ステート、ルームの寝牀は春畝、中堂の名と共に永く記念として残るなるべし。

室内の裝飾は、凡て古代風、即ち周圍の壁、壁掛け、室内の卓子、椅子皆極めて古雅にして古色蒼然、一見吾輩をして日本の古き寺院に入りたるの感あらしむ、白人の高尙なる趣味は、此邊あるかと思へば、彼等が日本の古き寺院を觀て頻りに稱賛するを見るも怪しむに足らず。

紐育に於ける最も高尙にして、豪華の生活を學ばんと欲せば、ワルドロフ旅館に於ける人種と其趣味を學ぶに勝る便利あるをえず。余輩は最も短かさ滯留の中に最も多く彼等の生活を研究せんと欲するを以て、觀察は中々に忙がしかりき、同旅館内には食堂三通りありて、東隅の食堂は凡ろ三四白人を容るゝに足り、館の中央には園庭(ガーデン)と稱する食堂ありて、多く熱帯地方の植物を蒐集し、宛然宏大なる園中にあるの想あり。其下には幾多の圓卓子を安置して、食事に供し又西隅の一食堂、はカフェー室として茲には、食事しながら喫煙もなし侍べく酒も呑むべし、全く自由自在なり。

旅館内には新聞雑誌の販賣店あり、電信局あり、電話局あり、其便利なると驚くに堪へたり。電話局の如きは、晝夜電話會社の本局より二人の婦人出張して、旅客の需用に供せり。

米國に於ける電話の完全なるには一驚を喫せざるを得ず。如何なる隔離にても、如何なる時間にても、如何なる喧囂雜沓の中にも、嘗て大聲を發して談話するとなし、電話に依て密談を爲すをも得べし、嘗て日本に於けるが如く、大聲疾呼して談話するとなし、至極の低聲に依て話すも其の談話手に取る如く聞ゆ。日本にて使用する電話



の如き不体裁、完全の電話器は、文明國にては到る處今日使用する處なし。日本に於ても電話改良の必要甚だ大なり。

米國にて電話の取次には殆ど盡く、婦人を用ゆ、是等の婦人を稱してハローガールス（ハロー娘）と稱す、其の故は電話を呼び出す、必らず先づハロー／＼と云ふが故なり。日本にてモシ／＼と云ふが如し。ハロー／＼と云ふは甚だ呼び易けれども、モシ／＼と呼ぶは甚だ可笑しき様感せらるゝなり。

米國にて電話線の發達驚くべきものあり、紐育とシカゴと千餘哩の間、密談手も取る如くに聞ゆ、恰も隣室の人と談話するよ異ならず、紐育とシカゴ間電話料五分間五弗にして紐育ポストン間は三弗、紐育費府間は一弗なりとす。十九世紀文明に依て發明せられ、人類に鴻益を與へたるもの少からずと雖も、電話の發明は最後の發明にして最も進歩したるものなりとす。最近電話線を用ゐずして、電話を傳ふるの機關を發明したるものありと傳ふ。其信偽未だ容易に信すべからずと雖も、近來文明科學の進歩著しきによれば、吾人の想像の達せざるもの續々發明せらるゝに至るべし。

却説ワルドロフ館に於ける、最も愛すべき好時刻は夕陽西に傾き、電燈の光り漸く燈々として輝く時より初まり、晚餐を終へて、夜の十時頃に至る迄とす、啾啾たる樂は徐ろに館の一隅より起り、燕尾服の紳士、盛装したる淑女雲の如く、彼方此方に逍遙するを見る。晚餐の際洋々たる樂聲は絶ゆる間もなし、目に金縷綺羅を見、口よ山海の珍味を味ひ、葡萄の美酒、夜光の盃、陶然として酔へる時の如きは、佛氏の所謂安樂淨土、七寶の莊嚴も之には過じと思はる、米人の豪奢實に驚絶駭絶。一夜紐育オールドの新聞記者、ワルドロフ旅館に余輩を訪ふ。談笑の際幾多の紳士、余輩の面前を逍遙するを見る。彼れ記者余輩に指して曰く。彼はバンダービルト也、彼はシエーグール也、彼は砂糖會社の長某也、彼は靴屋の主人某也、彼は醸造會社の長某也、彼は何、彼は何而して其財產を問へば皆幾百万弗、幾千万弗の貨財を有し、般風一世を睨倒せる紐育の豪族なりけり。此處よては百万圓の呼び聲は、濱の真砂の物の數ともならず。黄金世界は此の浮世にもありけり、誠よワルドロフ旅館は是等豪商豪富家の俱樂部にてありしなり。紐育府に於ける日本の紳士達は、一宵伊藤侯の爲めに此のワルドロフ旅館にて盛宴を



催し、侯の無恙紐府に着せると祝し、併せて其の万歳を謳へり。

### 西洋衣服流行

吾輩嘗て説を成して曰く、流行なき國民は趣味なき國民也。流行なき人民は、文華なき人民也。流行なき國家は、經濟的消費力の甚だ乏しき國家にして、富の程度最も低きものなり。畢竟流行は文明の産物にして、開化の流傳なりと論せり。此説驟かき聞けば奇なるか如きも奇ならず、却て幾多の經濟學上の眞理と、西洋文明の眞相を説明するものたり。生産を以て其國富の唯一の動力たりと唱導せし、古き英國經濟學説の如き、既に今日に於ては陳腐に屬せり。國民的消費力こそ、却て國家國民の富の動力たれ。生産力に依て左右せらるゝ國民は不文不進歩の國民にして、文明の民は其消費力に依て、常々其生産力を支配し鼓舞せり。眞成なる文明開化の果を結び國民的富の發達を希望するものは、消費力に依て生産力を左右し得るの、力なかる可からず。生産ありて消費あるに非ず。消費ありて生産あるなり、衣食住より人間

初めてあるに非ず、人類先づありて衣食住あるなり、供給ありて需要あるに非ず、需要ありて後供給起るものなり。斯くして初めて人力に依て、自然力を支配し得べし、文明の眞相は即ち是れのみ。東西人種の間にて文明の判るところ、寔に茲の一點に歸因す。

憶ふに西洋文明社會に流行の盛なるは、實に彼等が趣味意匠の富麗なる一証にして、生活の程度甚だ高く、消費力甚だ大にして、隨て生産力盛んに國民富の發達昂進著るしきを見るべし。蓋し國民的消費力は、生産の木挺よして、消費力の程度を以て生産の進歩を測度するも、瞭として火を見るよりも明かなり。抑も流行は國民消費の花なり、其流行の趨勢を見れば、以て一國消費の概觀を察するを得べし。之を歐米各國の實例に徴するに歴々として其迹顯著なり。流行の盛なるの地、國民の生産力も亦隆盛にして、頗る殷富を究む、流行の事甚だ少なりと雖も、以て國家の貧富盛衰を判知すべし、一國の文運を觀測するもの、決して偶然に看過すべさざる非ず。



日本に於けるが如く子々孫々、親の衣服は子、子の衣服は孫、遞傳百代に及ぶが如きは、歐米に於て決して見ざる所の奇談なり。亦因て以て人文の發達、富の程度を考察するに足る可き也。

歐米に於ける男女流行の變化遷移の激迅なる驚く可きものあり。英、米、獨、佛等の如き國に於ける流行の大勢は、人種的趣味の異ならざる限りは、大概調合一致するの傾向を有するものとす。蓋し交通の利便、新聞雜誌の普及等は皆此の流行の傾向を和同するの勢力たり、是等の諸國に於て流行のあらざるもの、一として存するものありと雖も、主として流行を有するものは、帽子、衣服、口襟、襟飾、ピン、襯衣、靴等にして這般の着物各々又形体、色合、縞柄、地質等に流行あり、千變萬化極まりなく大抵毎一年少くとも必らず流行の變遷ありと知るべし、特に婦人の夜會に要する着物の如きは、一年二回の遷移ありとす、甚だしきに至ては、四季其流行を同ふせざるものあり。

歐米の社會に在つては、人民の趣味甚だ發達せるが故に、何人も此の流行外に

逸出するを忌み、アウト、オブ、ファッション(時候後れ)と稱せらるゝと著しく耻ぢし時候後れの人を指笑すること甚だしく、結局社會の仲間外れとなるなり、我が日本の如きは、東洋に隔在するを以て、交際の便甚だ乏しく、亦巴里、倫敦、紐育等の流行を指示せる繪畫新聞なきを以て、何人も西洋の新流行を知るの便なし。故に西洋に於ける新流行の、漸く我が交際社會に傳般波及せんとするの頃には、流行の本源よては、既に廢棄し更に新流行の盛なる頃と知るべし。故に西歐に遊ばんとする人の爲めに、其注意を述べれば、必らず衣服帽子靴等の若き紐育、倫敦、巴里に於て新調すること器用といふべけれ。

近來我邦にても漸く、羽織の紋の大小、着物の物質、色合、帯、下駄等に流行盛ならんとするの兆あり。吾輩は是を以て惡弊の流行と見ず、奢侈の滋蔓とも見ず、實に物質的一進歩として之を叫んと欲す。然れども日本の社會に行はるゝ流行の如きは、其時限の遲緩なる、其區域の狹隘なる素より年を同うして謂ふ可からず。歐米の交際場裡の婦人の如きは、一二度夜會に着したる衣装の如きは、再び着せざるものあり、以



て其如何も新を競ひ、舊を去る變轉の甚だしきかを見るべし。苟しくも流行後れのものとし謂へば、如何なる綺羅も、殆ど三文の價値なき有様なり。流行あるものは、消費經濟學を研究するもの、最も注意すべき有益なる問題にして生産者(製造家産業家)の殊に直接に利益の開發を有するものあれば、熟察深考せざるべからざる題目とす。

日本の生産者(例へば絹織物業者に就て云へば)の如きは、深く此點に注意せざるか爲めに、常に西歐の生産者と競争して失敗せざるは稀なり、西歐の生産者は絶へず、此等の點に注意し、本年の流行は厚き織物を用ひ、斯々の色合なりと見れば、直ちに需要に供給するが爲めに其製造に着手せり。然るに日本の生産者は其等の點に順着せざるが爲に、流行後れの物品を産出して、奇利を占斷する能はざるのみならず、時としては是か爲めに二束三文に賣放たざるを得ざる事例甚だ多し、海外消費者の需要も供する生産物を製造する我が産業家は深く消費者の嗜好趣味の變遷に注意せざる可からず。

### 自 轉 車 の 大 繁 昌

自轉車の流行は今日に初まりしに非ざれども、其流行は今日よ於て殆ど其極端に達したるが如く、而かも流行の最も甚だしきを米國となす。自轉車に乗らざるものは、男として男も非ず、女にして女も非ずと云ふに至れり。人に逢ふ、必らず「貴下は自轉車も御乗りになりますか」と云へる疑問は必らず發せらるべし。嘗て婦人が自轉車に乗るの利益如何と云へる問題は、盛んに新聞や、雜誌や、演説や、社交に論せられたる一の社會問題なりしも、今は之を反問するに於ては、馬鹿者の如く思はる此を以て、三助もた三も猫も杓子も、自轉車に乗らざるものなき程まで、自轉車一二個位も所有せざる人は、肩身の狭き心地せらる、様となりたり。五六歳の鼻垂れ小僧より五六歳の白毛頭の婆さん達に至る迄、自轉車熱に浮されて、噪ぎ立ち乗廻らぬものはなし。二十九世紀の社會史綴る人あれは必らず現時を稱して自轉車時代の名稱を附するなるべし。其雜沓の甚夥しき、自轉車隊の多き到る處幾千となく唯恐ろし思とふ外なし。



一家親子兄弟姉妹下女下男、盡く自轉車を供へぬものなき自轉車氣狂の家族もあり、今迄使用し來りたる馬車を賣り飛ばして、自轉車を求むるもあり、非自轉車論の婦人も、何時しか處女的差しさを打忘れて、自轉車に乗り廻りて、日の暮るゝを覺へざるもあり、新聞雜誌に自轉車の廣告なきはなく、自轉車屋の入口には常に人の黒山を築き、自轉車乗を教授せる中學校も起り、頓ては大學校の出来る時も來るべし。淫賢婦人が、深夜自轉車に乗じて遊びに出るに至ては、自轉車の應用も亦甚だしい哉。

自轉車の交通に及ぼせる影響は、甚だ大なりと云ふ、是が爲めに市中の鐵道馬車、電氣鐵道、氣車迄も著るしく乗客を減ずるに及ぶるに於ては、其意外の邊に利害の衝突を及ぼせるを見るべし、將來に於ける人類の体格にも、著大なる變化を及ぼすに至るべしと云へる醫學者もなきに非ず。婦人の足力を増加し、著るしく婦人の腔骨を發達するに至るべしと云へる議論には、幾多の眞理あるを余輩も認めんと欲する也。

### 世界的紐育—更なる大なる紐育—

あるとあらゆる人種を網羅し、合して三百萬—世界第二の都府—の人口を有する都會は、紐育なりとす。萬國幾數十の異人種は、皆流轉して此の大都に來る。此處には一として地球上人類の標本を見ざるはなし、是等の異人種は、續て香餌を求めて此地に入り、各々一隅に割據して、部落をなし生計を營みつゝあり、極りなき異分子を嚙下して好く消化し盡せる紐育府の消化力の凄まじさよ。

人若し世界に、異人種の最も多き、生存競争の最も甚だしき、物價の最も高き、都府の最も噪がしき、而して人民の商業的最も敏捷なる地を問はゞ、紐育と答ふる外なし鐵道馬車や、綱鎖鐵道や、高架鐵道は、街の隅より隅まで東西南北、縱横無盡に貫通し、終日終夜、往來絶ゆる間もなし、其物質的活動の烈しさ、洵に十九世紀商業的、我利的活動の見本とて謂ふ可けれ。

紐育の名物は其物噪がしきにあり。馬車の音や、ケーブル列車の音や、高架氣車の音や、製造所の音や、混合錯雜したる一種不可思議の奇響は天地に満ちて、物噪しく氣



忙。し。く。心。の。休。む。暇。も。な。し。此。の。ユ。ス。モ。ボ。リ。タ。ン。紐。育。へ。出。入。す。る。通。路。幾。十。な。る。を。知。ら。ず。歐。洲。諸。國。よ。り。流。れ。來。る。入。路。に。は。凡。十。二。餘。の。汽。船。航。路。あ。り。其。外。に。は。南。米。、。中。央。米。、。西。印。度。、。墨。西。哥。灣。、。南。太。平。洋。岸。に。通。ず。る。航。路。十。餘。道。あ。り。、。ハ。ド。ソ。ン。河。、。ロ。ン。グ。、。ア。イ。ラ。ン。ド。を。通。じ。て。走。る。鐵。道。十。數。餘。道。は。、。紐。育。港。の。渡。し。船。に。て。紐。育。に。入。り。、。市。府。の。中。央。に。は。大。中。央。停。車。場。あ。り。由。つ。て。以。て。米。州。大。陸。の。旅。客。を。輸。送。す。る。を。得。べ。し。、。數。年。前。更。に。大。な。る。紐。育。府。 (Greater New York) なる。問。題。は。盛。に。起。り。、。此。の。問。題。の。結。果。と。し。て。紐。育。は。更。に。大。膨。脹。を。な。し。たり。、。蓋。し。此。の。問。題。た。る。や。、。所。謂。從。來。の。紐。育。府。な。る。も。の。に。更。に。、。ブ。ル。ク。リ。ン。市。、。ス。テ。ー。ツ。ン。島。、。紐。育。の。東。北。に。横。は。れ。る。廣。大。な。る。近。隣。の。地。方。を。包。括。せ。し。む。る。よ。あ。り。、。今。を。去。る。七。年。前。即。ち。一。八。九。〇。年。初。め。て。、。此。の。問。題。は。立。法。院。に。起。り。委。員。の。調。査。と。な。り。、。遂。に。一。八。九。五。年。に。至。て。紐。州。立。法。院。の。多。數。を。以。て。、。大。紐。育。府。の。問。題。は。可。決。せ。ら。れ。たり。、。於。是。紐。育。府。は。俄。然。と。し。て。大。膨。脹。を。な。し。、。其。面。積。三。百。二。十。方。哩。、。人。口。三。百。万。を。有。す。る。大。都。會。と。は。な。れ。り。、。今。や。紐。育。は。英。京。倫。敦。に。次。げ。る。、。世。界。第。二。の。大。都。た。り。、。而。し。て。毎。年。各。國。よ。り。此。地。に。流。れ。入。る。人。種。、。幾。萬。な。る。を。知。ら。ず。、。其。膨。脹。發。達。、。

駿。々。と。し。て。底。止。す。る。所。を。知。ら。ず。、。

### 紐育の暗黒世界

地球の半面、白日なれば其半面は暗夜なり、爛々たる文明の底には蒙々たる闇黒の横はるを見る、嗚呼！夜？吾人をして暫く紐育の暗黒世界に入らしめよ。日は暮れて、電燈の光、四隣を輝すの時、終日役々たる男女が業を終へて家に歸るの後、大通りの店は閉鎖せるの時、劇場の門戸は娑婆たる衣裳を着飾りたる婦人を見るの時、十四町目邊は煌々として晝の如く明なるの時、一步を轉じて横道に入れば讀者は闇の如き冥路に迷ひ入るべし。南ファイフス、アヘニウに足を轉ずれば、恐ろしき紐育の貧民窟発見すべし。益々長驅してサリバン、トムソン等の諸街よ入れば、住民多くは米、伊、佛、愛等諸異人種より成り立ち、其窶々しき生活を見るなるべし。更に進んでブリツカー街に達すれば、暗黒より忽ち輝きたる世界よ出で茲には怪しげある小さき伊太利、佛蘭西の飲食店を多く認む、此の地昔は（凡う五十年前）華麗の市街なりし



も今は名のみ残りて、昔時の面影もなし、家は廢れ壁は毀れて、豪者を極めし紅顔の美少年も、今は敢果なく白骨と化し、唯僅かに二三の奇しき青樓に名残を留るのみ。去てマルベール、ベンドに入れば、此處は亦別世界、宛然たる小伊太利國、暗黒世界の暗黒點、常夜の國とも云ふべき奇窟、罪人の隱家は此處ぞ、是れに隣りて支那街あり七千人の支那人は、蝨々として群をなし穢醜なる飲食店、ひさくろしき芝居小屋、穴倉の如き博奕場、朦朧たる阿片窟は軒を駢へて立てり、支那街も亦伊太利街の如く罪業の巢窟たり。殊に阿片窟の如きは、毒泉の最も甚だしきものなり。西人阿片窟を稱して、ジョイントと號す、一喫の阿片料は一弗にして、此の惡弊は、唯に其本源たる支那人社會に行はるゝのみならず、亦白人の間に密かに行はるゝに至れり、殊に支那街に出入せる白人の遊冶郎、遊女の徒、盛に此の惡習に感染して、殆底止ど所するを見ざらんとす。

足を轉じて所謂ポーウレー街に入れ、此處は是れ音に名高き、紐育の勇み兄の巢窟にて、一心太助流の若者の住家なり、文學家のデクケンスも此處に其理想的人物を見出じ、サクカレも遙々此處に来てボウロー男の風流を學び、左れども世は末となりけり。勇まじきボウロー男は何時しか消れて影もなく、哀れ名も香しきボウロー街、今は全く變じてビール嗜みの新移民たる獨逸民や銅臭好きの猶太人の巢窟となり果て、見る影だになし。

イースト河を降りて行けば、やがて露國町に来るべし、町幅は狭く住家は醜く薄暗く髯多く色黒き、幾多の露人は蝨々として露國的生涯を營みつゝあるを見るべし。彼等は酷しき軍國の責を免れて來りし者や、世に恐ろしき虚無黨の輩は、皆流れ落ちて、自由の郷の紐育に暫しの假住家を求むるものも多し、露人と共に苦しき生涯を分擔せる亡國民は、ホーランドの流民にぞある。此の一方哩内の奴隸は、實に露國に於ける革命黨の精神なりけり。

イースト河邊の町々は、井市の無職無頼漢の住家にて、毆打、鬭争、喧嘩の絶ゆる間もなく、夜毎に血と刃とを見ざるとなき、恐ろしき罪業の窩穴なれば、讀者を此の危険の巷に導くは得策にはあらじ。



讀者よ此恐ろしき罪惡の半面を見捨てよ、來れ吾輩と共に更に酒と女の暗黒界を探検せん十三丁目を上り行かん乎。酒肆の戸口より漏るゝ女の歌ひ聲、瓦斯の光りに輝ける酒肆の戸を排して奥深く歩め、小高き臺の上より直立せる怪しき女は、大口を開きて解らぬ歌を唱ふを聞かん、幾多の人は押しつ押されつ、黒山をなせり歌に合せるピアノの音は、破れ太鼓を叩くに似たり、倦みもせで聞きつる一群は、拍手喝采絶ゆる間なし。去て東十四丁目より足を轉じて、第三第四アベニューに入れば黄色の光は閃々として路頭を輝すを認むべし、數多の飲食舗や、酒肆や、遊び處の戸口を出入する遊治郎や花の如く着飾れる阿娘は、夜をこめて遊べる人の類ならめ、讀者若し第六アベニューを二十四丁目まで遡り行かば、街の角に華奢ある酒樓を認めん、戸を推して進み行け、其奥の階段を廻りて降れば、家の下層に廣やかなる室あり、壁の周圍は美しき椅子ありて、此の内は燦爛たる絹布を纏へる幾多の婦人と絹帽を戴ける年若き男は喃喃として語り、喋々として話し、嬉々として笑ひ、三鞭に酔ひ、葡萄に狂ふを見ん。此處をも去て、第六アベニューを上に進み廿五、廿六、廿七丁目を歩みなば途に幾多の

怪氣なる婦人に逢はん、更に進み三十一、三十二丁目を行かば、暗・暗・暗・迷路に陥りざれば幸也。

夜は闌けぬ、イザ讀者と共に吾家に歸へらん

### 伊藤侯の旅行流儀

侯の紐育に留まる僅に二日、侯の舊友并に侯を歓迎せし紐育の市民は、侯の滯留の甚だ短かきを啣てり、若し侯にして閑日子あらば、紐育市民は侯の爲めに日夜盛饗を張り、此の極東の政治家をして忙殺せしめしならん、然れども侯や蹇々の節を懐き瞬時も使命を完らせざらんとを慮り、謹慎自重、一日も速に有栖川大使を迎へんものと期待せらるゝものゝ如し。

左れば侯は五月九日、佛國船ヲ、カスヌン號と搭じて佛國ハーヅル港へ向て出發せられたり、見送りとして、紐育の日本紳士、米國公使、并に公使館員、其他侯の舊知たる米國著名の人士、多く此處に來集し懇ろに告別とせせり。紐育各新聞記者も亦船室に來



て侯を訪問し、侯と談話するもの多くを見受たり。斯くて出帆の信號と共に、諸人皆別を惜しみ同船を去れり、午後二時侯を乗せたるラ、ガスコン號は葛進して其影を止す。

紐育の市民は侯の來遊に就て、最も感したるが如く見へしは、侯の旅行の甚だ簡易儉素にして、然かも一として、東洋的臭味を帯びざりしにありたるが如し。侯の出發の翌日、紐育オールズ新聞は三個の諷刺畫を掲げ、「マイル將軍并に米國人民を警戒す」と題せり、(第一)畫には李鴻章を書き、其下に「牡孔雀の羽の御主人清國貴人の李鴻章は驕奢を極め派手の流儀に世界を旅した」と記し、(第二)畫に伊藤侯の手カバンを捉げ蝙蝠傘を携へ、至極簡素の風采を書き、其下は題して曰く「李の隆鼻を挫き見事支那をば齏粉微塵となしたる、日本の政治家伊藤は、シアパソンの如く、簡易質朴に世界を旅す」と蓋しシアハーンンは獨立戦争の大英雄、米國平民黨の開山、質朴なる爺なりき、(第三)畫にオールズ新聞の政敵たるマイル將軍がシャンパン酒の裡に横臥し、シガーを燃せる圖を書き其下に「マイル將軍は戦の際、東洋の王侯の如く、贅澤

なる眞似をして旅をなす、警戒せよ、吾々人民も警戒せよ」と諷したり。兎に角伊侯が旅行の、簡易質朴なるは米人が意料外に出でたるシアハーンンの旅行流儀なりき、思ひきや伊侯の遠遊、西人に一レスソンを與へんとは。

書劍飄然華府に向ふ

時は是れ、丘波問題の正に其奮激の極點に達し、布哇問題は、米人が日夜其成行を危惧する所、加之、米國々會は方にデンクレー關稅案を討議しつつあり。外交上財政上熟察討究すべき問題甚だ多し。此重大問題を雲煙過眼に付するは、素より余の望まざる處、而して此問題の真相を捉へんと欲すれば、政海の渦湍たる華盛頓府に赴かざる可からず。

伊藤侯に紐育に辭し、望月篤溪の英國に行くよ別れ、書劍飄然、獨り去て華盛頓に向ふ。

華盛頓は紐育より五時間の旅程にあり。陸奥廣吉君と宿約あれば、直ちに陸奥君の



旅館コロニアルを訪ふ、君既に余輩の爲めに君の隣室を借約せられたれば甚だ好都合を感じたり。此家の主人は年齒知命ぐらゐ親切なる老爺にして、面白き男なりき、而して此家はホテルも非ず、ボーディングに非ず、却て許多の便利を有せり、大統領の選挙騒動の際には、民主黨南部の本陣なりしとぞ、華盛頓は大共和國の政治的首府にして、創業建國の諸英雄が、政治をして紛々たる俗事の外に超然たらしめんが爲めの苦心よりして、故らに當初の首府たる費府より獨立せしめ此の地を下して、都を開き創業の初祖ワシントンの名を附して、千秋の後萬世の末迄、國民の紀念となせり。四十年前にありては、一個の寒村荒野たるに過ぎざりしも、今は道路と云ひ、家屋と云ひ、其の幽逸、雅潔なる世界多く其此を見ず。坦々たる大道は盡くべし、兩側には參差たる綠樹、滴るが如く、瀟目蒼兮、蔚兮、風光の美掬するに堪へたり。

て此府の生涯の一般を見るに足るべし。此地由來婦人多し凡る當府人口の三分の二は婦人なり。一日余輩旅館の食卓に就くの際、隣席の美婦人に其理由を問ふ。彼れ莞爾として曰く、華盛頓の閑雅清逸を慕ひ、各地より來て此地に生計を營まんとするが爲めなりと。彼又余輩に告げて曰く、此地の婦人は一の特權を享有する事を得、君知るや否や。余の曰く知らず、曰く當府の慣習として、貴婦人と雖も、男子の護衛なくして演劇を観ることを得べしと。蓋し米國の風習貴婦人たるもの決して男子の護衛なくして觀劇を爲すを得ざればなり。果して然り、演場に護衛なき幾多の貴婦人を見受けたり。

一日華盛頓の紀念塔に登る、高さ五百八十八尺、盡く大理石を以て築き、中にエレベーターあり、以て昇降便にす。是は世界第二の高塔にして、華盛頓の紀念のため、各州の財を匯集して建てたるものなり、頂上に數個の窓あり。以て四方を眺望すべし。一瞬を窓外より放てば、華盛頓府は落て脚下にあり。寸人豆馬蠕々とし動き、巍々たる大厦高樓も、宛として蟻塔螻蛭に異ならず、恍として身は天津空に登り、雲の通



路に遊びつゝあるの想ひを奪せり、拱手冥憶すれば、万感湧くが如く、人類は渾て是れ蟻群のみ、功名利達、毀譽榮辱、南柯郡裏の争ひのみ、何事ぞ、營々役々として五十年蟬蛻の命を了せんや、如かず、宇宙の天真を學び、造化と共に虚無に歸し、人生の兒戲を嗤はんまはど。放誕一番して、五百尺の高塔を降り來れば、渾身復俗塵の裡にあり。吁人は境遇の動物なりけり、核撒の物は核撒に歸せ、吾も亦俗世界の人に歸らん。

一夕陸奥、松居兩氏と外交官の俱樂部に於て會餐す、會員の多くは華盛頓に於ける外交連なりと云ふ、俱樂部の結構、頗る壯大華美、我が東京俱樂部の如き之に比すれば及ばざる甚だ遠し。

當府の新聞に數種あり、最も勢力ありて、紙數の最も大なるものは、ワシントンポストと稱する新聞なりとす。一日同新聞の主筆記者を訪ひ、談話數時間に及ぶ。大に丘波、布哇、並にデンクレー關稅案を就て討論せり、彼は自ら稱して民主黨員と稱す、而して新聞は獨立不偏なりと號せり。米國に於ける貨幣問題は、益々民間の氣焰を高

めつゝあり、大統領の選定は、未だ此問題の最後の判決として見る可からず、余輩の華盛頓に滯留するや、共和黨本部の貨幣調査委員は、余輩をコロニアルの旅館に訪ひ來り、日本幣制變革の事情を聞かんと求めり、故に余輩は余輩の意見を述べたり聞く所に依れば本年英國より二三の元老院議員は、日本を漫遊することに決定せりと云ふ、蓋し幣制問題等の調査の爲めなるべし。

### 華盛頓日本公使館

現在に於ても將來に於ても政治上、經濟上、日本と最も直接の關係を有する文明國は實に米國なりとす、現んや此際布哇問題の如きは、其性質布哇と日本との關係には非ずして、實に米國と日本との外交上の關係に外ならず。日米兩國外交上の關係必らずしも今日に初まりたるに非ずと雖も、日本が世界の一勢力として知られてより、即ち日清、戦争後に於て起りし外交上の事件として、最も周到なる關係なりとす。將來に於ては續々斯の如き外交問題のト米間に發生するを豫期せざる可からず。英佛獨露を以て



獨り外交の燒點と考ふるは迂濶極まる話と謂はざるを得ず。蓋し從來米國は既往三十年新日本の歴史中、最も我れに厚情を表したるものにして、我國は之に安心して、米國は政治上の野心なきものとなし、漫に英佛獨露にのみ留意して、米國を等閑に附するの傾きあるは策の得たるものに非ず。太平洋岸の共和國に對する、我外交通商共に將來益すべく、注意研究せざる可からず。

幸にして日本政府は、公使並に公使館員の選定其人を得、公使も亦我國の利益の爲めに、孜孜として東奔西走、夜を以て日に繼ぐ、洵に慶賀すべきなり、公使は久しく自由黨員として、其名を知られたる星亨氏なるも、一たび公使として海外に派駐するや彼の眼中唯國家あつて政黨あるなし、素より當に然らざるべからず。余輩嘗て星氏に一面の識なし、嘗て彼が政黨員として學識ある、西歐の教育を受けたる、一バリストアたるを知りしのみ。此地に來て初めて、其人に面し親しく彼と相語りて、大に其人となりを知るを得たり。彼は南米諸國が將來我が通商貿易に、偉大の關係を有するを見て通商條約を締結するの必要を感じ、既に其談判を開始せりと云ふ。其他布哇問題に、關稅問題

彼の奔走盡力、多しとするに足るものあり。殊に關稅案に對しては、非常の盡力をなし、デングレー關稅案の日本品に重稅を課するは、日本に於ける非米熱を惹起し、兩國々實際上の友誼を害するに至るべきを警戒し、且つ日本品に重稅を課するの必要なきを説き、(第一)日本品は、日本特殊の貨物にして、米國內地の競争品に非ざるが故に、歐洲諸國の輸入品と同一視す可からざる事、(第二)日本品に重稅を課するも、其増稅額は著しく政府財政上の便宜を與ふるものに非ざる事、故に日本品に重稅を課するは、内地の産業を保護する所以にも非ず、又財政上の都合より起りたるものにあらず、結局兩者の目的を誤まり、却て、日本國民の惡感情を求むるに留まるべきを以て、宜しく日本品に課する重稅を減少すべしと云へる議論を基き、新聞記者に政治家に就き、以て著しく日本品に課する稅率を減ずるを得たるは、公使たる彼の運動大に其宜を得たるものたるを疑はず。

日本公使館員は書記官陸奧廣吉、松井慶四郎二氏事務を掌れり。二氏共に春秋に富み、敏捷活達、將來有望の外交官たるべし、陸奧氏の才鋒銳利なる、確か父伯の才性を



稟受せしものあり、氏や伯の相續者として、乃父を辱しめざるべし。陸奥松井二氏の  
外に、豊島氏書記生たり、ステープンズ氏は日本公使館の顧問として、忠勤最も力む、  
氏は嘗て在日本米國公使館の書記官たりしも、來我政府に聘せられて。十年一日の如  
く、既に日本公使館に職を奉じて、十五年の星霜を閱せり、彼は日本公使館に活ける、  
歴史と稱するも不可なし、彼の忠勤や實に得難し。

在米日本公使館は、其人物を有する點に於て、其學識を有する點に於て、余輩は敢て遺  
憾ある處を見ず。然れども余輩は其家屋の餘り貧寒らしきを目撃し、甚だ遺憾に堪へ  
ざるを以て、何とか其改造を我本國政府に促さざるを得ず、其建築物は小造りの赤煉  
瓦の家にて、其結構極めて粗惡如何よしとも堂々たる日本帝國を、代表せる公使館とは  
思はれず、此は吉田公使の時に當時の日本を代表するが爲めに、購求したる家屋なれ  
ば、其狹隘なるは言を俟たず。何人か若し公使に而會し、若しくは公使館に要事ありて、  
日本公使館を訪ふものあらんには、只憐むべき一個の小家屋を、邊鄙なる町端に發見  
すべし。公使館の事務所に入らんとするよりは正面よりは入らずして家屋の東側に沿ふ

て、小きき園に入り家の後背よある、怪しげなる低き粗末なる木にて造れる垣の偏扉  
を推して、全く家の後に出で、狹隘なる木造の階段を踏んで入るなり。是は普通の家に  
ては、下女下男の出入する勝手口にして、洗濯物などを、乾洒せる脊戸口なり。斯か  
る邪徑が日本公使館の通用道なりと思へば、何となく氣差しさに勝入す。應て此風  
雨に暴されたる木造の階段を登りて、二階に通ずれば、直ちに公使館の公務室に突  
入す可し、一個の客室とてもなく、其不体裁千萬なる驚くべし。四人の事務官は四個  
の卓子を駢べ頭を鳩めて此の中に埋り居れり、公使の室は其の隣りに在りて、而し  
て公使の家族の棲住する處は、二階と正面の室とを領せり。是を日本公使館の概觀  
となす。余輩は如何も是を以て日本政府と日本國民を代表する。我公使館として觀  
るに忍びず、三四年前増栗野公使の米國にありし際、紐育ヘラルド新聞に、支那公使  
館と比較して日本公使館の、狹隘卑陋なるを評せるの辭を觀たり。面して今尙依然と  
して、舊時の觀を更めざるなり。公使館の如きは、接遇應對、國際上頗る重要なるも  
のにして、通常人の交際を成すものは、通常人の衣服と住居を有せざる可からざるは



文明社會の流儀なるは、此流儀に外れて文明社會に仕事を成さんとする、抑も亦難いかな。若し日本公使館を以て、支那公使館に比較せば、實に雲壤の相違あり、日本公使館を一見するもの、何人か日本國の貧乏らしき、加減を連想せざるものあらんや、殊に在米日本公使館を以て、其他諸國の公使館の建築物に比較し來れば、其劣等なること萬々なり。是等の現象は從來我邦が米國に於ける、外交を輕視して無頓着に打過したるに由るなるべしと雖も、將來米國との通商外交は、益々多端滋殖すべきを以て、日本の皇帝と五千万の國民を代表せる、此の共和國に於ける我が公使館の如きは、少くとも尊敬せらるべき者たらざるべからず、余輩は我本國政府が此邊に注意して、如何にか方法を運らし公使館の改築に着手せられんことを希望するものなり。

國務卿シヤーマン氏を訪ふ

西班牙の武運拙なく、兵勢久しく振はず、米國元老院は方に丘波島の獨立を是認せんとし、島民遠征軍の失敗は、同國政府の大蹉跌として人心漸く離反し、カノフハー内閣

顛覆の電信は、華盛頓政府に達したる瞬時、布哇に對する我軍艦派遣の一事大に米民をして我政略を疑はしめ、爲に布哇合同の問題、朝野の間に勃興せり。此際一日余は國務省にシヤーマン卿を訪ふ。卿は快く余を引見せり、案内者に導かれて卿の官房に到る、官房は修飾なき質々としたる室にして、彼は室の中央に大なる卓子に面し、怪しげなる黒き古びたる脊廣を着たり。是れシヤーマンなり、其側らに一人の秘書官然たる男あり。今や卿は何事をか訓令して、秘書官然たる男は、忙はしうに其命令する處を筆記し居たるを見、余は此際甚だ彼の多忙なるを知りたり、然れども彼は毫も厭ふ色なく、手を伸して余に握手をなし、傍の椅子を興へて余に坐せしめたり。余は此の時初めて好く、名高き共和黨の政治家シヤーマン氏の面貌に接するを得たり。彼は年紀古稀なるべし白髮蒼顔、瘦骨稜々として、眼光鷹の如く鋭く、色少しく黒く、丈高くの風采一見余をして吾が陸奥伯を想ひ出さしめたり。

余は彼の甚だ多忙なるを知るが故に、長くは彼の公務を防げざるべしと約せり。余は先づ彼に面會を求むるが爲に來りし理由を告げ、先づ當今の外交社會流行問題たる丘波



に關して、西班牙に對する米國の政略を聞かん事を求めたり、而して後に布哇問題を聞かんせり、彼は共和黨中一流の外交家、今代の流行役者、素より其心底の秘密を打明け余に談る可しと思はれず。余も亦一場の會話、彼の政略の秘密を聞く可しと思はざるなり。

彼の談話中、西班牙に對する彼の意見の要領は、即ち左の如し。

西班牙内政の變革は、米國との國際上の關係に變動を及ぼすべきものなし。縱ひカイノトバー内閣倒れて、ザガスタ内閣之に繼ぐと雖も、從來の外交方針に變動を來すべきものあるを見ず、唯カノトバー内閣の時と同様の方針に依て進むべきのみ。而して丘波島民は、西班牙に於ける内閣の辨動に依て得る所あらざるべし。何となればカノトバーは、既に出來得る丈の讓歩を、丘波島民に與へて、改革を行はんと試みしが故に、ザガスタ之に代ると雖も、丘波島を放擲するに非ざるよりは、進で施すべき讓歩の餘地を存せざればなり。而して丘波島の放擲は、サカスタと雖も敢てせざるべし。一方より之れを見れば、丘波島民は決して姑息の改革を以て満足すべきに

非らず。姑息の改革は時機既去て遠し矣。今日に及で丘波島民を悦服すべき方案は、只だ一の放任自治あるのみ。

氏は丘波の自治に關して、一の方案を有せり、而して氏がカイバーと協商して、丘波島民の爲めに施行せんとする方針は、全然丘波をして自治政府を作らしむるあり、而して其方法に至つては頗る複雑を究むるもの如し。

先づ丘波島に最高等の法院を設立し、之を全島の立法權裁判權を委任せしむるにあり。該法院の法官は總數三十五人にして、皆島の住民ならざる可からず。而して其内二十一人は、丘波人の選舉する所として、他の十四人は同島最高の教育的團體、并ぶ宗教的團體より指定せしむ。之れと同時に島の總督を廢し、其代りに西班牙政府の利害を代表せる一人の監督者を選定し、其權限は總督の如く大ならず、單に丘波島の財政并に歳入を監督するに止む。左れば丘波の法院は、西班牙に於ける君主の代表者に非ず、其法官の廿一人は、確かに十四人の小數に對して絶對の多數を制するを得べし、此の如くにして丘波島民は其自治を享有するを得べきなり。是れ米國を務大臣シヤ



マン氏の丘波嶋に對する意見にして、西班牙總理大臣カノーバー氏と協商熟議せし所なり。氏は此の自治案を以て、適當なる然かも實行し得べき最良の方案なりとし尙丘波嶋民は一刻も速かき此方案に賛同し、戦争を停止して平和を樂しむの得策たる可きを信するもの如し。

シヤーマン氏の西班牙に對する政略は、右の如くにして、此政略たる西班牙内閣の變動に關せず、遂行すべきものありと謂へり。而して氏は如何なる場合に於ても、干戈を把て西班牙丘波の葛藤に干渉し、若くは強迫して兩國の戦闘を中止せしめんと欲する者に非ず、然れども平和の手段により、双方の満足し得べき最良の方法に依て、速かき兩國の戦争を調和せんとは願ふ所なりと論せり。シヤーマン氏の意見は公平にして偏せず、恐くは是れ獨り國務大臣の私見に止まらずして、米國人民の良心ある輿論ならん。

余は長く國務卿シヤーマン氏の、公務を妨げん事を氣の毒に思ひて辭して去らんとすれば、氏は余を國務次官クリトラー氏に紹介せられたり。於是、余はシヤーマン卿と

握手し、案内者に導かれて次官の官房に赴けり。

クリトラー氏は頗る磊落風の人物、忙がまざるに何事かを一人の書記を命じ、タイプ、ライターにて寫さしめつゝあり、大臣より紹介せられたる余を見て、微笑を漾へ余輩の面前に歩み來りて、握手したり而して後、彼は余に謝して云へるやう、一二分間よて仕事を終るべければ、暫く俟ち給へよと、机上に累積せる書類中より、何事かを捜し出して傍の書記に指圖し置き立て、余輩の傍に來て座せり。彼は寧ろ肥滿せる方の質にて、舉動頗る快活なり、談話數時間、日米貿易の奨勵伸長に關して講究する處あり、氏は大に余輩の意見に賛同の意を表し、大統領にも余の意見を上申すべしと約せられたり、昨年米國の實業協會の商況視察員として、日本に來遊せるポーター氏も亦た來て其の席にあり。次官の紹介に依て面晤するを得たり。余將に辭して歸らんとす、クリトラー氏立て余輩の肩を撫して曰く、大統領マツキンレー氏今ま費府にあり、君蓋を往て見ざるやと、余の曰く多謝多謝、再會を約して去る矣。



キヤピトル(議事堂)に遊ぶの記

一日陸奥君と携へて議事堂を觀る、北米合衆國六千萬人が選出せし代議士、元老院議員が國事を商議するの聖堂なり。透遷たる石造の通路を過ぎて、大理石もて築ける幾層の階段を登り、仰げば轟然たる圓塔の蒼穹に登ゆるを見る、其兩側には莊嚴なる希臘風の大理石の建築物を望む。左側なるは元老院、右側なるは代議院、更に石階を躋りて建物の裡に入れば、大なる圓形の室に出づ、天井は都て玻璃にて造り、壁には斯共和國諸名士の肖像と、歴史上の圖書を掛け、周圍には大理石、青銅にて造れる歴代の大統領の肖像を建つ。堂内の小使番人は、都て是れ畸形、廢疾、手無き人もあり、足無き人もあり、銃瘡劔疵の痕、斑々たるもの多きを認む。去て其理由を問へば、皆是れ皆國事の爲め、硝烟彈雨の間よ、馳驅せし當年の愛國者、戰鬪場裡の英雄なり。彼等か瘡痕の痕は、一として國家の存立の爲めに、自由の精神に徇ふるが爲めに、盡したる丹心赤誠に非ざるなきを以て、今昇平の世、此の義士をして、此聖堂を守らしむる也と。之を聞て余輩長嘆之を久ふし、自由愛國の精神、磅礴して其國を成せることを感せずんばならず。

轉じて左側の議事堂に入る、八十餘名の各州の元老、今方にデングレー關稅法案の税率を討議しつゝあり。何人も傍聽席に出入して議事を傍觀するを得るの自由を有す。議事の光景は頗る平穩なり。議事堂は頗る朴質あり、元老の机上は書類散亂し、机下には書籍の滿積せるをも見たり。元老の大半は席にあらす、其席にあるものは、或は新聞を讀むもあり、何事か書面を認めつゝあるもあり、議場の一邊を黙々として逍遙しつゝあるもあり、之も頗着せず屹立して演説をなすもあり、議場内に新聞記者の平氣に出入するもあり、新聞記者の元老と何事か談話しつゝあるもあり、更よ不思議なるは、十二三の小僧が、議長の椅子の下に四五人並びて踞座するものあり。或は無頓着に、然も無邪氣に議事最中、議場内を飛び廻るも見たり。是れ議場の小使なるべし其光景無秩序の如くにして、然も自から規則あるが如く、感服の外なし。元老院の議場を去て、右側の代議院に到る、此處には二百餘名の議員列席せり。元老院に視れば更に年少の議員多く、壯語危言、饒舌多辯の士の淵養と見受けたり。余輩



が傍聴席に入りし時、小唄の議員起立して、大音聲に手を振り足を動かして、過激の演説を試みつゝあり。然れども議員中一向に感動したるもの無きが如くなりき。其次に議場の左側よりニユウト立て、演説をなし初めたる男は、年猶三十前後、西部の田舎議員と見えて、風采は頗る揚らず、衣服も垢染みて、然も脊廣の上衣を着し、一種風變りの議員なれども、辯舌頗る巧妙、言論頗る過激、幾度か滿場に笑聲を動かせり。論じ去り論じ來り、一場一抑、擒縱自在、反對議員を嘲笑して顔色なからしめたる手際、中々に感心なり、其論辯中に果して彼は西部田舎の議員にて、ポビユリスト（人民黨）と稱する、共產黨然たる新政黨員たるを知るを得たり。聞く彼は代議院中屈指の雄辯家として、過激論者として、名を知られたるものなりと、彼の激論するや、漸く議場喧擾し來るを見る。同時に議長は木槌を擧げて、鎮靜を命じ、議場を整理す、木槌の音、議場に響き渡るや、忽ち靜肅を歸す。彼れ又新聞の切抜きを取出して議場にて朗讀せんとすれば、議長木槌を強擧して遂に彼をして讀ましめず。彼の演説中、議長木槌を擧つと四回、遂に全く彼をして沈黙せしめたり、米國の代議院議長は、頗る專制なりと聞きしが、

果して然り、何れの國にても下院は遙か上院よりも活氣あり、活劇あり、隨て聴衆も亦下院に多し、何れの國にても下院には花役者多く、狂言じみたる事も度々あり、東西制一轍乎。

國會政治は多頭の統治なり、庶民の統治なり、腕力の統治なり、往昔は部落の政治を共議したる蠻民が、議合はざる時は、刀を振り、意見を拔て、意見の勝敗を其下に決したりしが、多頭の意見は、腕力の強勢を意味し、多くは勝を占めたりき。永き歲月の経験は、蠻民よ、意見の衝突を干戈よ由て決するの痴愚たるを論じ、期くして血を流し、骨を枯らし、て勝敗利鈍を争ふを廢止し、遂に今日の國會政治の端を啓くに至りぬ、されば國會政治は學者の發明よ非ず、立法家の制定に非ず、其起源は遠く蠻民の腕力政治よ基因せるものにてありき。余輩は國會政治を以て、無缺完美の政治なりと信せず、平々凡々たる庶民の通識を聚めたる、一個の便宜的政治なりと信するのみ。即ち大過なく又大功德なし。若し夫れ專制的堯舜の政治、斯し得べくんば、余輩は之に趨かん、然れども千歳英雄は得難く、萬古聖人は求むるに由なし、遂に國民の常識常智を聚めたる、國會



政治の得易くして、然かも大過失もなく、大勳業もなき、政治の便宜あるに如かざるを奈何せんや。然れども國會政治をして大過なからしめんよは、國民の教育、國民の道德を啓蒙せしめざる可からず。蓋し庶民政治なるものは、國民の智識と道德に、其基本を建つるものなればなり。若し國民の智識道德にして、薄弱少乏したらんには、焉んぞ國會政治の美を收むるを得んや、唯徒らに其弊に勝へざらんを是れ恐る。我邦既に黎民をして、政治の大權に參與せしめ、載ち茲に國會政治の端を肇む。民政主義、一度動くや、又停止すべからず、經世の士、深く鑑みて、憲政の美を濟し、國會政治の圓滿なる發達を遂げしめんを要するにあり。

### 米國大統領を訪ふの記

金銀兩黨の争は、南北戦争後に起りたる米國歴史上の最大事件なりとす。其争や地理上の區劃に就て之を論ずれば、東北と西南との利害の争ひ也。之を經濟的産業の區劃に就て論ずれば、農鑛業と商工業の利益の争ひ也。而して此争ひよりして、數

十年來繼續したる共和黨、民主黨兩黨の訓練は全く此に破壊せられ、殆んど性質を一變せる政黨は此の混沌の中より、顯出し來れり、其猶は共和、民主の舊名を踐踏せるは、唯た備かに慣習の勢力のみ、共和黨中には、從來の民主黨あり、民主黨中、從來の共和黨あり、從來共和民主の分る所以は、其政治的分權と集權との異色に由れり、而して今の兩黨の分る、所以は、主として銀貨自由鑄造を以て商況不振を恢復する最良政策となし、共和黨は、保護交易を信じ、關稅増率を以て經濟界を一新し得べしとなし、銀貨自由鑄造の如きは、國家を溝壑に投ずるものとなす。蓋し先年米國政府が、銀塊買收を停止してより、不景氣の嘆聲は、國の四隅に起り、景況恢復、財界一振の聲は、隅より隅に反響し、政界の題目となり、政黨の綱領となり、議士論客、辨難攻撃、夜を以て日に繼ぐ、會々大統領の任期満ちて、新大統領の問題は起れり。六千万の共和人民、熱して狂するが如く、大統領候補論は天下の議題となれり。

無名の少年、田舎新聞の主筆、不世出の奇才たるブライアンは、辯を揮ふ波濤の如く辭を馳する春馬の如く、其天稟の銀舌を弄して俄然として風雲を捲き、シカゴ大統領



候補場裡に、百万の視聽を驚せり。其説く所の過激なる銀論、奇抜なる不景氣挽回策痛慨なる平民主義は、幾千万人經濟的窮乏に呻吟せる平民を歡躍喜舞せしめ、ブライアンの呼聲は、救世主の響の如く口より口に傳はれり。是の如くにして渠は暗黒裏の飛躍をなし、一跳黃嘴の一青年よりして、垂天翼を叩きて蒼穹に飛揚す、缺々たる斗屑の政流、屏息して其影を隠せり。

是於乎共和黨は、オハイヲ州ナポレオント稱せられたる、温厚正徳沈黙の英雄マキンレーに、万目一齊、其視線を投せり。渠は靜かにオハイオの閑莊より起てり。一は漢の高祖に類し、一は楚の項羽に似たり。兩雄覇を天下に争ふ、龍圖虎搏一世の奇觀たり。木強漢たる沛公遂に中原の鹿を獲て、一代の奇才、拔山蓋世の勇を懷て卒に核下に敗る。

北米共和國大統領の月桂冠は、遂にマキンレーの掌上に落ちたり。渠はホワイト、ハウス(白館)に入りて既半歳垂んとす。而して共和黨員の天下を約せられたる、商況恢復著く其跡を見ず、嘆聲漸く喧しく、共和黨中猶は不平の聲を放つものあり。費

府の豪商前の遞信大臣ワナーカーの如き、公然公衆の前より立て、現内閣の非をし痛論、大にマキンレー政治の續擧らざるを攻撃せり。政府の財政は頗る困難にして、關稅を増加して収入を計らざるを得ざるに至り、關稅案は今方に上院の議にあり、而してマキンレー撰擧に大馬の勞を致したる徒輩は、四境より華盛頓に蟻附聚至して、官を獵せんとし、謁をマキンレーに請ふもの、日に幾百なるを知らず。商權の恢復容易ならず、財政の前途險難多く、不平の聲は四方に聞へ、於是乎、マキンレーの人望政略となり、禮を卑ふして庶民に接し、黎首を遇し、應對甚だ務め、又東奔西走、殆ど其席の暖かなるに遑あらず。

余が華盛頓に在るや、渠は費府に於ける商業博物館の開場式に臨場して、首府にあらす。余が歐洲の期日、眼前に迫り、方に華盛頓府を去らんとして行李を調理するの際大統領の首府に歸り來るを聞けり。即ち行て謁を請はんとし、大統領の秘書官ポータ氏をホワイト、ハウスに見る。ホワイト、ハウスの左側には、大藏省あり、右側には國務省あり、館は甚だ大ならず、其館名の如く白く大理石にて築き構造は希臘風の建築



物たり。左右兩側に入口あり、中央には庭園あり、花圃あり、噴水器あり、絶へず高く水を噴出せり庭園中よは三四の園丁の世話するを見たり。白館の後背には廣き園庭あり、噴水樹木齊然として、流石に大統領の花園に耻ぢず。余は左側の門より入りて白館の左側の石階を登れば、入口よは丈高き門番の立てるを見たり。渠は余に問ふて「君は大統領君に用事ありや。」用事？、嗚呼此の國は飽くまで商賣化したる國なるかな、大統領に逢ふ事さへビジネスと稱するにや。淡泊の平民主義なるかなと余は心底に感じたり。「否、余は秘書官、ホーター君に逢はんが爲めに來れり。」然らば二階へ上りて左りの應接所に居る小使に問ひ給へ」と渠は余に教へたり。

斯くして余は二階に登り、門番の教ゆる如くにして、余が刺を通じたり。渠は事務室より出て來れり、余は不幸にして大統領の留守中、華盛頓府に滯留して、未だ大統領に會合するの機を得ざるを悲むを告げ。方に當日を以て華府を辭し、歐洲行の途に就かんとすれば、暫時なりとも足下の親切ある紹介に依て、大統領君に會合するの策を得や否やを問へり、渠は瞬時の間、小首を傾けて「うは甚だ悪しき機會なり、本日は内

閣集會日よして多忙なれば、恐くは足下の會合談話するの時機なからん、若し足下に於て、長く談合する能はざるも、猶ほ満足せらるゝならば、敢て足下を大統領に紹介するの勞を取らん。」

余の曰く「可なり。」  
「然らば午後三時を期して、白館東室よて余に會せよ、大統領に握手せんとして毎日數百人來れば、其最後よ余は足下を大統領に紹介すべければ、其際足下は多少大統領に面會する機會あらん。」

余の曰く大に可なり。余が好奇心は坐るに堪へ難くなりたり、午後三時を期して、余は白館の東室に來れり。東室は大統領の應接間よして、白館の東にあるが故に、斯くは名けたる者ならんか。疊數の二三百疊も敷かるべき大廣間にして、隅なく土耳其段通を敷き詰め、周圍の四壁には、鏡を懸け椅子を駢べ、室の中央よは大なる熱帶地方の植物を置けり。一見頗る莊嚴の光景あり。余が此室に入りし時には、早く既に幾多の群衆は、此中に三々伍々鳩まり居たり。暫くにして續々入り來る人は



無慮三百人よ達せんとしたり。如何なる人種の人々なるかを見るに、田舎より来る百姓あり、商人あり大工あり、老婆あり、乙女あり、赤子あり、妻君あり、後家もあり、學校の生徒もあれば黒奴もあり。馬車にて来る紳士もあるかと思へば、自轉車にて大統領の玄關に附けにするもあり。種々雑多の人種より成れる、此大統領の珍客、觀し来れば無量の興味あり。暫くにして門番は来りて、唯今大統領は入來すれば一同齊列せられん事を希望すと述べれば、群がる諸客は一同一行に列をなし、長蛇の蟠るが如くソロソロと、廣き東室を繞回したり。室の西側の扉を排するや、尨大なる黒衣の一人顯れ出で來り、柱の下に立てり。一同之に視線を投すれば、此は是れ大統領にあらで、警護の査公にして、其次に來りしは真正の大統領なりき。余は長蛇の如き形状をなせる二列の群衆の最後に立ち、白館の園庭を見降す窓に倚りて、靜かに立てり。蓋し最後に大統領と談話するの機會を得んと欲したればなり。大統領は少しく丈低く、肩幅は廣き方なり。其尨大なる査公の隣りに立てるが故に、事更に小兵に見へたり。渠はフロック、コートを着し、白の短衣を纏へり、上衣のボ

タンホールに、白き花を押したるを認めぬ。渠は余が屢々圖書、及び寫眞にて見たるが如き容貌の人にして、眉と目を密接して別つ可からざるが如き處、廣き額、突出したる顴、何處となく奈破翁に類似せるからに、オハイオ、ナポレオンとの綽名を得たるものあるべく、一見如何にも温厚正實の君子の如く見へたり。渠が入り來るや否や、長蛇の如き列群は動き始めたり。渠は莞爾として一人毎に握手し、ニツ三ツ位の親の手に引かれて、歩む童子迄にも手を出して握手し、或は其頭を撫するを見たり。斯くして渠は一々數百人に握手して、遂に余の番に到着したり。渠の秘書官は、余を渠に紹介したり。余は進んで握手し、渠は逢の榮を得たるを謝し、絶東の新聞記者たるを渠に告げ、渠が此光榮ある地位に就くを見るは、日本國民の皆な羨慕に堪へざる所なるを告げたるに、渠は莞爾として、頭を下げて謝するの意を表せり。渠は余か何時華盛頓に來りしやを問ひ、猶ほ同府に長く滯留するや否や、若し更に當府に滯留するを得ば、緩々面會するの機を與へらるべしと約せられたり。余は深く渠の厚意を謝し一々之れに答へ不幸にして渠の外出中同府に居り、徐に面謁するの榮を享くるの機を



失したる事を告げ、歐洲漫遊の爲め、出發の機既に迫れるを以て方に同日を以て華盛頓府を去らざるを得ざるを談り、更に歸國の途、再び米國を通過するの機會あらば、其時は拜肩の榮を得たき希望を述べ、其他二三の小話を試みて、暇を請へり。顧みて東室を見廻せば、群客多く散じて、室内今は寂寞たり。ホワイト、ハウスの門を出で、仰き見れば北米共和國の國旗は高く館上に懸々たり。余は則ち直に客舎に歸り、馬車を命じて、華盛頓停車場に趨けり。停車場裡に陸奥書記官と、再會を約して袖を分てば涼笛一聲身は歐洲行の途上にあり。

### 英京倫敦風土記

歐洲巡遊の途に上るに、久しく米國の生活に慣れたる我身に取りて、別世界に入るの思あり。英國は歐洲諸國の中、最も活氣に富める世界なれども、斬新快活なる米國に比すれば、事々物々皆靜穩に又皆溫和に見ゆるも不思議なり。例ふれば米國は二十歳前後の血氣盛なる青年、英國は四十の上と二三歳も越へたらんと思はるゝ人の如し。左れ

は建國の久しきに隨つて、民人も溫和にして、事々物々沈着、優美に見ゆるは道理なり。長く米國に生活したるものが、太平洋を渡りて、リベールの港内に着きし時より、感觸を受くるものは先づ第一に、汽車なり。

英國の汽車は、之を米國のに比せば外觀美ならずして其客車殊に倭少也、是獨り英國のみならず、歐洲大陸の汽車皆然り。米國は國の大なるに隨つて、運輸の便利と、旅客の快樂とに注意すること多けれども、英國にては然らず、國境の一端より他端に至るまで通乘するも僅かに數日間に過ぎざれば、鐵道の快樂と云へる事には、左支でに重さを置かざること見たり。米國のブルマン、カーの如き、華美と愉快とを盡せる汽車は、世界に其比を見ずと云ふも決して過言に非ず。左れども米國の汽車の缺點は、其噪がしきにあり、即ち汽車の停車場に出入する毎に絶えず、機關車上に懸けたる大鐘を打鳴らすは、誠に旅客をして噪心の感を起さしむ、歐洲の汽車は此點に於て非難すべき所なし、左れば停車場の如きも、米國の停車場に比すれば殆ど睡眠中にゐるが如く靜穩なり。



リバープール停車場より倫敦に達するには三個の鐵道線路あり。其中最も中央線路を可とす、兩都の間實に四時間程なり、途中車窓より田舎の光景に接するを得、若し大陸の風色に慣れたる旅客にして、一たび英國の山川を見れば、優美の感を起さるはなし、一山一水盡く是畫圖、其圍圃の狀、田家の古態、牛羊の妻々たる綠草の裡に逍遙するの觀、風韻洵に掬すべきなり。

旅客は到る處、多少人家稠密の邊は、煙突の高く天に聳へて黒煙の濛々たるを睹て一見其英國が工業國たるの名を乗かざるを感ずるならん。

### 倫敦奇事

天下に聞はれたる英京倫敦、世界の都、十九世紀の羅馬、奇事珍聞一にして足らず、其の奇事珍聞を拾蒐せば、五車又足らじ、此は唯々倫敦特有の異聞三四を述べんのみ。

倫敦の圓、米國に旅行するものは、市中圓の少きに苦しむ、人多きも、英京にては此不便を感せず。殊に其圓は一般の趣も異なり、大概市街の廣き所は一個の圓あり、而も

路上にみらせしめて、地下穴を穿てる處に在り。概ね清潔にして上層者心に快し、且つ圓には常に一二の番人あり、大便に用ある客あれば、番人は來りて鍵を以て戸を開き、圓中を掃除して、用便をなさしむ、されば決して不潔の憂なし。而して旅客は必ず此の番人に一片を與へざるべからず、要するに倫敦市中に於ける圓制度は、歐洲大陸何れの處よりも善良なるものなりと信す。

市街の不規則。倫敦は煤烟の名所、是が爲めに到る所の家屋盡く火を以て燻したるが如く、甚だ黝黒なるは何人も知る處、曾て倫敦を見ざるものも亦之を知らざることなし。煤烟は倫敦の一名物なれども、市街の不規則なるは更に倫敦の大名物なりと云ふべし。市街の道幅は概ね狹隘昔時のまゝなるが故に、其の混雜云ふ可からず。市道の不規則千萬なる、殆ど五歩一轉、十歩に一折の觀あり。左れば倫敦の町名を記憶せんとし、道路を請んせんとするは、少くとも半年の歳月を要せん。故に米國に於けるが如き新開國の市街の生活に慣熟したる旅客は、倫敦に來りては、殆ど迷室の裡に彷徨するの感あるべし。而して倫敦市街の縱横錯雜なるよりして、左の現象は起り來れ







とすれば少くも一志を興へざるべからず。馭者は隈なく全市を知るが故に、未知未踏の地に行くには、此馬車を備ふを以て至便とす。

### 英國の新聞事業

新聞事業としては英國新聞は、米國新聞に及ばざると遠しと雖も、歐洲全土に於ては最も發達せるものあり。殊にタイムスの如き、其精確にして勢力多大なる點に於ては世界多く其比を見ず、余は一日朝比奈珂南と共にタイムス社を訪ひ、案内に依り社内を一見し、併せて夕刊新聞發刊の模様を一見せり。之を米國に於ける紐育ヘラルド、紐育ウオールドの新器械を用ひて迅速に事を行ふに比すれば、迂遠の方法に依るものあるを認めたり。英國第一流のタイムス新聞にして然り、其他推知すべきあり。然れども英國新聞の特色は、其眞面目なるにあり、沈着なるにあり、是最も感心すべき處なれども、其眞面目なるに隨ひ、其沈着あるに隨つて、一個の營業としては米國新聞に及ばざる處と知るべし、倫敦タイムスは實に英國新聞の特色と發揮するものにして、

又英國新聞の精華と謂つべし、然れども其タイムス新聞が英國新聞の特色にして其精華なるに隨つて、其發行高は甚だ少く、其購讀者は案外に少數なるを知るべし。即ち或る信すべき邊の証明する處に依れば、其發行高は毎日三万に過ぎずと謂ふ。其名聲の四海に震ふ大新聞としての發行高の如何に少きかを知るものは、其新聞の名聲と勢力とは、必ずしも其發行高の多寡に依るもの非ざるを知るべきなり。

英國新聞にして今猶ほ古風を維持するものは、モーニング、ポスト、スタンダード并にデーリー、ニュースの三新聞なりとす。是等は皆有力の新聞なり、近來朝刊新聞デーリー、テレグラフ並にデーリー、クロニクル、夕刊新聞にペール、メール、ガゼット並にサンの四新聞各々新特色を有して起れり。

英國新聞社は多くはフリート、ストリート町にあり。是日本の銀座街とも云ふべき處によして新聞社街とも云ふべき處なり。今ま茲に英國新聞を朝夕刊行に類別し、政黨の色分を明すれば即ち左の如し

### 朝刊新聞



- デーリー、クロニクル 自由黨
- デーリー、グラフィック 聯合黨
- デーリー、メール 無主義
- デーリー、ニュース 自由黨機關新聞
- デーリー、テレグラフ 保守黨
- モーニング 保守黨
- モーニング、アドバタイザ 保守黨
- モーニング、リター 急進黨
- モーニング、ポスト 保守黨
- タイムス 獨立
- スタンダード 保守黨機關新聞

夕刊新聞

- エコー 獨立

- イヴニング、ニューズ 保守黨
  - イヴニング、スタンダード 保守黨
  - グローブ 保守黨
  - ペール、メール、ガゼット 保守黨
  - スター 急進黨
  - サン 保守黨
  - シント、ジエームス、ガゼット 保守黨
  - ウエストミンスター、ガゼット 自由黨
- ウエストミンスターの國會議事堂

代議政体の本尊、民権主義の元祖として文明諸國が推戴せる英國が其産聲を放ちし處は、即ち此のウエストミンスターの議事堂なり。一面はテームス河に枕み、一面はウエストミンスター、アビイに對し、今古幾百年、煤烟に燻りて古色を帯びたる態、是を



即ち議事堂の外観なり。而して高く聳ゆる此議事堂の時計臺よりは、鐘打鳴らして時を報するに差はず。此一個の寺院然たる建物、昔時は祭司の神に仕ふる神殿と聞きしよ、物變り星移り、今は久しく人間の最も發達せる、智力を揮ひて國政を議するの家とは變じぬ。

爆裂彈を以て、天下の王侯將相を殲滅せんとしたるも此家なりき、美名の下に幾多の罪惡を行ひしも此家なりき。幾多の不世出の英才を發揮せしめたるも此家なりき。而して今も猶ほ大英國民一世の希望、實に一度此のウエストミンスター議事堂に入らんと欲するにあるなり。蓋し富強殷盛宇内に比あき、大英國政治の燒點は、此家にあればなり。

余輩はウエストミンスター議事堂を觀んと欲し、一夜朝比奈知泉氏と共にサー、チャールズ、デルク氏の紹介に依り、傍聽券を得て議事堂に行けり。堂の入口には、大理石を以て彫める幾多英國政治家の肖像を安置せるあり。是皆な此の堂中に在りて其大名を成したるもの、多量に俯仰感慨に堪へんや。其最も余が心を動かせるものをピツ

トの像とあす。彼れ身を一書生に起し、年未だ廿五ならずして、英國大宰相の印綬を帯び國歩艱難の時に處して、克く外、強敵を挫き、内、政敵を推倒し、未曾有の權勢を把持して國政を調理すると十餘年、彼亦一生の雄なるかな、去て議場に望む、議員既に多く席あり、討議正に盛なり。議場は東隅の一室にして、甚だ狹隘なり、議員の席は室の兩側に各五列あり、恰も瀛車中に於ける腰掛の如く、黒の皮にて造り、甚だ不作法なり。左側は政府黨席にして、右側は反對黨席たり、而して政府黨の大臣次官、其他地位高き者は、概して第一列を占むるを常とし、反對黨席の其第一列も是と同じく反對派の有力者の議席たり。此夜デルク氏は反對黨席第一列に座するを見たり。入口の正面は議長席にして、議長は長毛の髪を冠り、佛壇の如き箱様のもの、中に座を占め、同じく髪を冠りたる書記官二名其下に座す。

普通傍聽席は二階にあり、余等の坐せる特別傍聽席は、僅かに四五人を容るゝ止まり、議員の坐せる直後として、僅に一條の鐵棒を以て強るのみ。普通傍聽席の一段後よは鐵網あり、其背後には幾多の貴婦人の坐するを見る。婦人は網目より容易に議場



を眺むるを得べきも、議員席よりは之を認むるを得ず、蓋し是れ婦人を尊敬するの風因襲久しきをなすに依ると云ふ。見渡せば議場は狼籍たり、議員に帽子を被るものあり、被らざるものあり、新聞を読むものあり、耳語するものあり、敵も味方も悠然として迫らざるの風あり、當夜恰も労働者と傭主とに關する或る法案の討議の際なりしを以て傍聴席には労働者の親分とも云ふべき人を認むること多かりき。

英國に於ける議事の模様は是にて一見したり、議題は面白からず、夜は閑ならんとす乃ち議場を辭して去れり。議事最中余が最も感したるは、英國人民の保守的、然かも一種優美の思想を有することなりき。其議場は數百年前のまゝ、よて簡易質朴愛すべく、其議場の狹隘なる議員を容るゝの席なきにも拘はらず、敢て議場を改築せんとするの考慮をも起さず、其不便を忍びて力めて古色を存するを旨とす、然かも其議員は小節に拘々たらず、禮節を重んじて言論を慎しみ、辯難攻撃をなすと雖も、言野卑に流れず、自由保守兩黨二派、且に政權を受授して邦家を泰山の安きに置く、憲政の美、爰よ至て初めて完しと云ふ可し。宜なるかな英國が立憲政治の北斗となり、議會討議の

指南車となり、以て世界文明に裨益する處多きや。

余今此議事堂に入り、嘗てピット、フォクス、ホルク等が其銀舌を揮ひし處ビール、パーマーストーン、ジスレリ、グラツドストーンが其不朽の名を成せし處、其他一世の俊才豪傑が芳名を百代に樹てし處なるを思へば、千古英俊の精靈髣髴として身に薄るを覺ゆ。

### 英國を論ず

即位六十年英國女王金剛大祭は、英帝國が正其光榮の絶頂に達したるを示す所以のものとして、英帝國の富強、未だ嘗て今日より富強なるはなく、英國民の強大、未だ嘗て今日より強大なるはわらず世界列國其富強壯大を仰視して、企て及ばずとなす、誰か知らん、羅馬人がブロン鬘民を征服せし時に於てノーマンの海賊等がサクソン人種を襲服せし時に於て、此の西歐の一孤島、爰そ今日の盛事あるとを夢みんや、余萬里を遠しとせずして來て、此の壯觀を目撃し、潛志默考、俯仰天地、思を今古よ



馳せ、國運消長の原理と文華盛衰の大則とを明かにせんとして、憶ふ英國が今日の盛大富疆を致す所以のもの、決して徒爾に非らじ、羅馬は一日の羅馬に非ず、英國這般隆運の由て來る一朝一夕の故に非ず、今日の英國を竅攻するは、凡る國家の富疆を圖る所以の途を究むるものにして、其國民を攻究するは、世界に最大國民たるの秘訣を學ぶもの也。

然らば即ち余が英皇六十年金剛大祭を論ずる所以實に英國の過去を論じ、現在を論じ、而して其將來の大策を論ずる所以にして、徒らに其空前の盛觀を眩々し、黃金の奢侈錦繡の表飾を觀て其外觀の壯嚴雄大を嘖々せんと欲するもの非ざるを知らむ。

(上) 英 帝 國 膨 脹 論

(下) 英 帝 國 彌 縫 論

請ふ以上の二篇に於て之を論せん、

(上) 英 帝 國 膨 脹 論

英國女皇即位以來六十年、(千八百三十七年—九十七年)是れ英國歴史中、未曾有の長

き治世として、而かも其間に於ける英國が富の進歩、學術の發達、商工業の増進、帝國領土の擴張は空前絶後古今萬國共に其比を見ざるもの、即ち最近六十年間の英國本土並に其殖民地に於ける物質的進歩の偉大なるは驚嘆に堪へざるものあり、英國民が是が爲めに歡天喜地、此の永き平和の御代を謳歌するは決して怪むに足らず、吾人は茲に暫く此の帝國が這の六十年間に於ける進歩の大勢を觀測して、其の膨脹發達の程度を概論せん。

(一) 英國(本島)の經濟的進歩

(第二) 人口の増殖力は、其國民の生産力、殖民力の程度を明かにするものとして、此點に於て英國民は確かに世界第一等の地位にあるものたり、蓋し英國富源の開發、殖民地の成功、主として此に歸因せるを觀るなり、今代女皇即位の當時(一八三七年)英國全島の人口は僅に二千五百萬而して殖民地の人口に至ては二百萬に超へず然るに今日(九十七年)全島並に殖民地の人口を合すれば五千二百萬以上に昇れり、即ち六十年間英國は殆ど二倍の増殖を致せり、其他英民の米國に歸化せしもの殆ど千四百万



有餘なり、以て英元播殖の盛なるを見るべし。

(第二)鐵道事業は國家の最大運轉機關にして、其盛衰は以て國家の分配事業の消長をトするに足る六十年前に在ては英國全島の鐵道、僅かに數千哩に過ぎず、然るに今日にありては二万一千哩に達せり而して之が爲めに放下したる資本額は實に十億万磅の巨額に昇れりといふ、世界萬國、米國を除くの外、如是巨大の資本を鐵道に放下せしもの其れ何くはか有る、而して是等の資本は皆な會社及一個人の放資に依るものにして、鐵道會社の収入は毎年九千万磅に超え、殆ど英國政府の歳入より肩を比せんとし、其鐵道會社の役員は三十万に達せんとし、其數大英國の陸海軍人の兵員に過ぐといふ又其鐵道哩數は遙かに佛、獨、露、を凌壓して其旅客の數は、殆ど全歐大陸の總計と等しからんとすと言ふに至りては豈に驚く可きに非ずや。

(第三)更に眼を轉じて英國製造工業を見よ、英國の富強は實に疑ひもなく其鉅大なる製造工業の發達に基因せるものなるを發見せむ、大ナポレオンが討英の政策は彼の工業を蹂躪するに非ざれば能はざる可きを吾人に示せり、されば彼は大陸の商港を封鎖

して以て此國の工業を自滅せしめんと計れり、然も實に此の大野心を墜跌せしめ、千歳の奇兒をして空しくシント、ヘレナの水煙漠々裏に憤死せしめたるは亦實に此の英國製造工業の力興て多きに居るを看る、然れども當時の英國の製造工業なるものは、今日より之を見れば殆ど兒戲に等しく、其一歳の價格僅かに一億万磅に過ぎず、然るに現時英國工業一歳の價格を算すれば、少くとも八億万磅に出づ、而して此の工業用の爲めに使役せらるる職工の數、實に三百方に踰ゆ。

此の三百方の職工を使役して成る八億万磅の工業生産物は何人が之を消費する、驚くべし其三分の二は盡く國內に於て消費せられて僅に其餘分なる三分の一のみ遠く海外に輸出せらる、要するに英國生産の大華主は、海外よりは非ずして其内地の人民たるを知れ、而して其國民の經濟的消費力の盛且大なるを知れ、是れ抑も此國民が國富み家昌へ、文運の進歩を奄有するの所以なる耶非耶。

(第四)海外に於ける英國國民の航海業の如きも最近殆ど六倍の進歩をなせり、六十年前にありては、其利一億千百万磅に出でざりしもの、今日に至りては六億五千万磅に達



せるを見る、誰か是を長足絶大の進歩と云はざるものぞ。  
(第五)更ニ金融の機關、商業の槓杆たる英國の銀行業を看よ、六十年前よりありては、英國各銀行の資本預金の總額二億万磅に過ぎざりき、然るに今や八億万磅の巨額に達せり、以て此國銀行業の發達の一般を推知するを得む、特に英蘭銀行の資本の如きは佛蘭西、獨逸銀行の總資本額と幾と等しからんとす、英國が世界金融の燒點たるを云ふも怪しむに足らざる也、

(第六)船舶の數量の増加は海上商業交易の發達に缺く可からざる要素なり、過去六十年間に於ける英國の船舶の數量の増加は、如何に英國が其船舶數量の増加と共に、海上に於ける商業交易の機關を伸張したるの事實を發見するを得む、即ち六十年前にありては、二百五十萬噸に過ぎざりし數量、今日に於ては八百萬噸に出でたり、換言すれば英國船舶の數量は、六十年間に三倍餘、即ち二十年毎に一倍の發達を成せるものなり、如是英國航海力の長足の進歩をなせしものは、其原因一にして足らずと雖も、其造船業の一大進歩は、疑もなく英國航海力の發達に與て力なくんばならず、蓋し一時英國

に於ける造船業は全世界造船業の三分の二を占有せる事ありき、以て其の偉大なる本業の發達を見む。

(第七)驚くべき機械力の發達は、正に英國製造工業の大進歩を指示するに餘りあるを知らむ、而して是等の機械力は皆最近文明科學の新發明の機械を使用運轉するが爲め用ゐらるゝものにして、一として人力を省略し、生産費を減少するの効驗あらざるはなし、即ち六十年前にありては英國に於ける全機械力は蒸氣力水力を合して十萬三千馬力に過ぎざりしもの、今日に於ては三百萬馬力を有するに至れり、其の發達増加何者か能く是に類例するを得む、而して此の三百萬馬力なる機械力は、英國に於ける現時の製造工業の機械を運轉するに必要な馬力にして、若し人力に依て之を運轉する場合には、五千万の労働者を使役せざるを得ず、然らば即ち英國全土の人口を擧げて、製造工業に使用するも猶ほ遠く及ばざるを見む、機械力の効用豈に亦た偉ならずや、然も以上の統計的數字は機械力の發達と、製造工業の進歩とは兩翼双輪の如く、相俟て離る可からざるを証する也。



(第八)以上論述したる所を以て、畧々英國々民が最近絶大の伸張を成したる所以を見るに足るべし、然れども是れ等は主として私人經濟の發達にして、國家の經濟として之を論ずる時は未だ以て足れりとせず、更に是より英國の晚近國家的經濟の發達に就て少しく論ずる所あるべし。

政府歳入の膨脹國債の減少は未だ必らずしも獨り國富の増進として論ず可からずと雖も、國民既に富みて其負擔に苦まず、而して政府の財政に餘裕を生ずるが如き情況にありては、國家的經濟の進歩亦た大に觀るべきものあるを見む、英國に於ける晚近、國債の情況は頗る好況にありと云ふべし、クリミア戰爭中國債の増加著しきものありと雖、戰後忽ち減少せられたり、六十年前、英國々債の總額は、八億万磅なりしも今は六億六千万磅に減少せり、即ち國債に於ては其負擔の五分の一を減少したるものと云ふべし、更其公債利子の減少に至ては、大に財政の整理として見るべきあり、而して政府毎年の歳入に於ても同一の好況を認むるを得べし、即ち六十年前にありては、英政府の歳入四千八百万磅に過ぎざりしもの、現時に於ては既に二倍に達し、九千六

百万磅の統計を示せり。

國民的經濟の進歩は國家的經濟の進歩と相俟て離る可からず、茲に國民經濟の進歩あれば、彼に國家的經濟の進歩あるは、自然の勢なりと雖も、善良なる財政の進歩と國富の伸張とは更に密接の關係を有するものたるを知らざる可からず、論じて是に至る、英國が晚近經濟的大進歩を爲せし所以決して偶然に非ざるを知るなり。

英國に工業的革命的起てより、今日に至る迄英國全土に於ける生産の組織、人口の分配は全く一變するに至れり、而して此の經濟的革命的餘波として英國の對外政略に新紀期を啓き殖民政略に新活力を與ふるに至れり、請ふ少しく之を述へん乎。

英國に於ける經濟上の革命とは何ぞや、機械の發明より、蒸氣力の應用よりして、全く英國在來家庭的工業を削滅し、自由交易の開始、工業の發達は、著しく英國の農業を壓倒し、農夫は多く其利益少なき土地に附着するよりも、利益多き工場に入るの勝れるを見て、田舎の百姓は家族相携へて世襲の借地を地主に返却し、都會に入りて工業の民と化せり、於是、田園荒蕪と歸するもの多く、田舎は人口稀少にして益々寂寥



を感ずると同時に都會は人口愈々稠密を來し、人口の増加と共に倍々繁昌を極めり、而して幾世紀間農業專一の英國は、俄然として茲に工業國に移化したる其趨勢は今日に於ても變せずして現に英國全人口の大半は皆な都民となりたり、猶は遠からずして英國全島人口の三分の二を驅て都門に入らしめ、其餘れる僅かに三分の一のみ田舎に留まると過ぎざるべきを信するなり。

英國に於ける人口の大半は、既に今日に於て都會の人民たり、彼等は皆な殆ど製造工業に従事せざるはなし、而して衣食住に要する粗製品を供給する農民は僅かに人口の半ばに及ばず、由是觀之、然も猶將來を察すれば英國全島を擧げて工業の府と化しんと云ふ必ずしも過言に非ず、果して然らば彼等は如何にして、其人民の生活に必要な衣食住の原料を得べきか、英國民を擧げて工業國民たらしめば、如何なる邊に向て其毎歳生産する工業品を輸出すべき乎。

米洲の大陸乎、歐洲の大陸乎、兎も角にも英國は其の何れかに向て其工業品を輸出せざる可からず、否らざらん乎、英國の工業は蕪地衰頽し、其國富は俄然として墜落

し來らんこと數の最も視易きもの也、英國民は熟く之れを知れり、乃ち之を知るが故に其自國の工業品を消費するの地を發見するも汲々たり、其の外交、其の通商、其の殖民、一として此目的に出でざるはなし、然れども各國各々立法の權を有す、英國の貨物、廉價にして其市場に競争して自國の工業品を壓倒せんとするの勢あらん乎、忽ち英國品に課税して以て其陸梁を制するを得べし、英國たるもの果して如何、故に英國は歐洲大陸並に米洲大陸の如き獨立國の市場を唯一の目的として自國工業の基礎を定め其工業的生産品を消費するの地と爲す能はず、何となれば是等の諸國は、何時たりとも自由に立法の作用に準て、英國品の輸入を禁止し得べく、而して英國の工業は俄然それが爲め衰頽に傾きて亦之を奈何ともする能はざるべければ也。

於是乎、英國殖民地は英國本土の生存に缺く可からざる者となれり、蓋し殖民地は英國の地位より之を論ずれば、英國工業品販賣所にして又英國本土人民が衣食住に必要な物品を得るの地たり。

請ふ英國殖民地が如何に、英國の尊大なる生存に必要なるかを説かん。



## 二 英國殖民地の經濟的進歩

經濟上より觀察する時は、英國殖民地は三種の區別あり、甲種の英領地は全く英國に服従して、一方には英國に其粗製品並に衣食の重要品を供し、一方には英國より巨大の工業品を需要する殖民地是なり、乙種の英領地は、主として兵略上の必要に生じ、隨て其地勢の重要なるよりして商業上重要なるもの是なり、丙種の英領地は全く英國と財政上の關係なく、皆各々獨立せる立法議會を有し、單に太守の英國女皇に依て指定せらるゝ關係よりして、僅かに英國と其關係を保持せるもの是なり(甲)第一種の英領地は屬すべきものは印度を以て第一となす、印度は英國製造品の最大消費場にして英國製造家は盡く印度の市場を獨占するものたるを見るなり、英國貨物の印度に輸出するもの毎年三千万磅の巨額に達す、而して其輸出重要品は木綿織物品最も多く鐵、機械等其他之に類するものにして英國より印度に輸出するものみにして、是等商品は英國全輸出總額の四分の一に達せり、如是、それ然り、世界中英國の好華客たるもの印度は如くものなし、印度は獨り商業上英國の大華主たるのみならず、亦實に英國

資本家が放資の地たり、英國資本家が印度の公債(鐵道其他の生産業の爲めに募りしもの)に其資本を投せしもの、既に三億万磅に達せんとし、其他茶、ユヒー、礦業等の有利の事業の爲めに、放資せしもの茲に精算を示す能はずと雖も殆ど二億五千万餘に出づと云ふ、之を要するに英國資本の印度にのみ注入せられたるもの、六億万磅に出でんとす、豈に驚くべきの巨額ならずや。

如是英國政府人民共に力を盡して印度を養成する所以は、蓋し印度は英國生存の一大要素なれば也、其他印度に於ける經濟的發達の爲めに英國が行ひし處のもの一にして足らず、是れ印度の開發は、獨り英國が其工業的生産品の市場を擴張する爲めのみならずして又實に英國民が生活に必要な食品の供給を其領土より得んと欲するの主題に外ならず、試に看よ、印度より英國に輸出する、小麦、米等生活に必需品の毎年の總計千七百万ルーブルの巨額に達するを、是の如くにして英民は其生活に必要な農業場を其領土より得て、而して其工業の民を養ひ、我は専ら工藝に力を盡し、資本を投じて其高價なる製作品を以て、再び印度の人民に供す、國家の利益何物か是れより大



なるものあらんや。

逐々の慾は其爪牙を爰に止めず更に印度内地に紡績業を起して以て東洋の銀貨國市場に供し、其交通に使せんが爲め、盛に鐵道を架設して今日に於ては既に二万哩に達せり又一方に於ては大に印度行政の組織を改良し、東印度會社を一廢して、太守を置き、印度備兵反亂の一舉以來は兵制を革新して、歐兵を増加し、猶且つベンガル、マドラス、ボンベイの獨立せる三大兵域を總合して、一提督の指揮下に屬せしめたり、是と同時に久しく、印度海上警察に屬せしめたる、印度海軍を改めて、大英國海軍の統括に附せしめ以て印度海上の勢力を増加せり、又印度に於ける司法制度に改良を施し、嘗て英人と印度人とは其裁判所を異よせしもの今は全く之を廢し、一の上等裁判所を設け、英印兩人種の區別なく一様な法庭に立つを得るに至らしめぬ。

其他農業の誘導は云ふを俟たず、教育制度の改良公衆衛生の保護注意、宗教の自由等大に源泉涵養に其力を用ひたり。

如是にして印度は軌近長足の伸張をなせり、今其印度の財政を看るよ、大凡半世紀前

にありては、印度政府歳入の總額二千百万ルーブルに過ぎざりしもの、今日に於ては九千五百万ルーブルの額に達せり、以て其印度富源の如何に啓發せられたるかを看るに足らむ、而して此啓發は印度其者の爲ならずして英國其者の生存の爲なるは彼の經營の醒醒たるを見て其想察に難からざらん。

然れども天下の富源てふ印度も猶彼が前途の爲めには満足の地にあらず、由是軌近彼の全土を一發併呑するの後更よ其の蠶食力を地球の四隅よ求めんとせり、其の討索の手に中れるものを亞非利加とす。

六十年前にありては、亞非利加に於ける英領地は甚だ多からざりき、然るよ、彼の蠶食力の迅速なる、俄然として大膨脹をなし、今日に於ては既に全亞非利加大陸の四分の一を略有せり、即ち其占領地は殆ど二百五十万方哩に達せんとし、其人口は四千五百万に及ぶと云ふ、而して是等の蠶食地は皆な豊饒の沃土にして、白人の殖民に適し、將來生産の發達大に看るべきものあり、加之此の略有地の四邊には英領の保護國たる名の下に在る邦國甚だ多し、是等は早晚彼が蠶食に遭ふべき不幸の王國たるを豫言す



るに難からず、抑も英國が終始一貫せる工業的國是の爲めに驕奢的生活の爲に、必用的生活の爲に、殖民的政略と名義を以て此の大領土を掠收せし英雄は幾多是れあり。彼のウルゼー卿の如き、ゴルドル將軍の如き、クロマー卿の如き、皆な自國の此の國是を奉じて、海外に其封土を略したるもの也、而して今日猶ほ英國は益々其蠶食の鋒

銚を銳利にして、到る處地球の四隅に其地を發見せんとしつゝあるなり。昔は羅馬の盛なるや、兵を四境に出して蠻族を斬服し、出て其國家的強盜を働き、以て一代の富強を致せり、今は四境に不毛の地を開き、其殖民を利して、工業の利益を貪らんとす、其形勢は異ると雖も、其精神は即ち一のみ、坤輿上に國を建つるもの豊深く鑑みて而して懼れざる可けんや。

乙種に属すべき英領地は、直接に英國政府に隷属す、然れども英領土甚だ小にして全面積百万方哩に満たず、人口僅よ五百万に達せずと雖、世界の最も緊要なる地位を散布するを以て、兵略上は重要なる、殆ど其比を見ず、随て間接に是より生ずる經濟上の効驗亦甚だ大なるものあり。

此種の英領地に属するものは、(第一)シブラルター海峽、(第二)マルタ島(第三)サイラス島、(第四)錫蘭、(第五)シンガポールの海峽殖民地、(第六)香港、(第七)ボルネオ島、(第八)ニウグイニア(第九)フィジー島、(第十)太平洋諸島、(第十一)フォルクランド諸嶋、(第十二)西印度、(第十三)英領グイアナ、(第十四)ムリテア諸島是等とす、是の如く其他幾十の英領に属せる英國海軍の重鎮は、地中海、印度洋、太平洋、濠洲大陸の近海、南北米洲大陸亞非利加大陸の近岸到る處に散布し、以て海上の警衛を爲し、一朝事あるの時は、皆な英國海軍を至大の利便と保護とを與ふるもの也英國が海上に其覇權を揮ふ決して偶然に非ずと雖も、亦た以て其用意の周到なるを看るべきあり。

丙種に属すべき英領地は、大に以上記述したる英領地と其性質を異にす、昔は英國殖民地の一部たりしと雖も、其發達成長と同時に、各々自治政体を啓き、議會を有し、政府を有し殆ど母國たる英國と其關係を絶つに至れり、而して是等の自治的殖民地は猶ほ英國と一縷の關係を有する所以は、是等殖民地の太守は英國女皇の指揮に属すべき



ものたるにあり、而して是等の殖民地は英國より全く獨立せる立法部を有するが故に、英國より輸入せる商品に課税することを得べく、又其精神に於て英律と異なりたる法律を作るを得べく、如是にして英國との關係は愈々薄弱なるに至れり、而して母國たる英國と是等の自由獨立の殖民地とを結合せる條絆は、感情の力與て多しとす故に感情一度弛弛せんか、是等の殖民地は、全く獨立不羈、英國に關係なき邦國となるに至るべし。

是等の自治獨立の殖民地に屬すべきものは。

(第一)北米に於ける加奈陀及びニュー、フオンドランド

(第二)南亞非利加に於けるケープ、殖民地並にナタル

(第三)濠洲に於ける

クインスランド

ニュー、サウス、ウエールス

ビクトリア

南部オーストリア

西部オーストリア

### 英國を論ず

(下)英帝國彌縫論

バビロン帝國の繁榮は、既に久しくアッシリアの荒原に葬られ、埃及の富強は、ピラミッドに昔の名残を留め、カルセーシの殷盛は、亞非利加の磯打波に餘哀を漲らせ、羅馬帝國の全盛さへ、今は空しく大伯河邊寂莫の中に、其古へを忍ばしむるのみ。

遼古は暫く之を云はず、中世より近代に至る迄、國家國民興亡昇沈の跡、算し來れば其れ幾許ぞや西班牙の富強今何くにかある、和蘭の隆盛今何くにかある、シャーンレーマンの雄畧、ナポレオンの覇圖、今將た何くにかある、彼等は皆な諸共に霧の如く消へ煙の如く散じ、空しく白砂碧草の裡に其殘趾を摸索するに過ぎず、嗚呼古往今來、國運の盛衰を觀じ來れば、宛かも日月盈昃の數に伴し、日既に中すれば即ち傾き、月既に



に満つるときは即ち虜く獨り何れの國か其權勢の絶頂に達して、而して傾倒せざるものにあらむや、斯くして羅馬も亡び、西班牙も亡び、和蘭も亡び、佛蘭西も亡びたりき。エリサベス王朝の時に至るまで、幾千年今の所謂大英國を民なるものは、一個の蠻島民視せられ、大陸諸國は嘗て英國民を以て歐洲政治舞臺の一役者たることを承認せざりしあり、彼が西班牙との海戰に於て勝利を博してより、初めて歐洲國民の會議に一議席を占むるを得、遂に歐洲大陸の西岸に一國民の存立を知らるゝに至りしなり、是時に於て、ブリトン人民何ぞ自ら今日の大英國民を夢想せんや、大陸諸國又奚ぞ此の一小蠻嶋が數百年を出でずして世界に雄飛する大帝國民たることを豫測せんや。

英國人民は近世よ及んで絶大の進歩を成せり、殊よ最近六十年間に驚くべき發達をなせり、其國富の進歩、其殖民地の伸張、天下何人も之と争ふものなし、歐洲大陸諸國より一蠻島國民と思惟せられたるブリトン人民は、今は危然たる大帝國民を化し、羅馬帝國の盛時よりも更に大なる領地と國民とを有するに至れり、而して其般盛富強は、遂に英國をして世界の覇權を把握せしむるに至れり、嘗て羅馬國民の掌中より逸出した

る。世界の覇權は今轉じて英國民の手中に收む。然らば英國民は永久に其覇權を把握し得べきか、換言すれば今日に於ける英國の般盛富強は、永劫末代に保進し得べきものなりや、是れ英國民生活の問題にして、英國民が世界歴史上の疑問として、解釋せざる可からざる所のものなり。

吾人の觀る所を以てすれば、英國の盛運は、今日に於て大に其歩を緩うし、或は恐る六十年祭は偶々以て其富強の絶頂に達したるを示すものに非ざるなきかと、何を以て之を云ふか、英國の國勢は進取の地位に非ずして、寧ろ退守の地位に立つものあればなり、且つや現時英國の策士論客が、英帝國の防衛維持に就て論ずる處を見るに、嘗てな是れ華々汲々として、帝國の彌縫を講ずるものならざるはなし、即ち英民が目下如何に其國勢を維持するに痛心するかを見るに足らん、今や英國の般富世界に冠たるは何人々疑はざる處なりと雖も、其無量の般富の陰には恐ろしき、破壊力の存在せるを認めざるを得ず、即ち從來英國の般富を致したる原因並に其結果は今に至りて、英國の盛大を危くせんとするの觀あり。



蓋し英國をして今日の盛を致さしめたる所以のものは、實に其偉大なる工業の發達に基因せざるを得ず、而して偉大なる英國工業の發達は、英國の大過半数の人民をして工業の人民たらしめ、非常の生産的人口を工業に偏重せしめたるの結果は大に食品を供給すべき農産業を衰頽せしめ、全島英國民の生存に最必要なる需要品の大半は盡く外國より輸入せざるを得ざるに至り、是が爲めに英國が毎年の生活必需品の輸入に對して支拂ふ處のものは、四億五千万磅(日本貨にて四十五億万円)の巨額に達せり、是れ豈驚く可き事相に非ずや、四億五千万磅の支拂は、英國が毎年其國民の生存を維持するが爲めに外國に向て支拂はざる可からざる處なりとす、而して英國は如何にして毎歲其巨額の支拂をなすかを見るに、其方法に數種あるを認む。

(一)貸付金の利子 英國は世界各國の金貨にして、諸國に資本を貸與せるもの凡二三十億磅に達せり、此の貸付資本に對する毎年の利子を以て、其輸入品に對する支拂に充つるを得べし。

(二)海上運輸料 英國の船舶は世界到る處に輻湊し、世界各國の運輸の便に供するを

以て、其毎年の運輸料の總額は頗る大なるものなり、而して英國の得べき是等の收入は巨大なる輸入品に充つべき一財源なりとす。

然れども右に論せる資本利子の償還、海上運輸料の總額は、未だ以て四億五千万磅の毎年の支拂に充つるに足らず、更に大に輸入品の支拂を填充するものなかる可からず

(三)工業輸出品 是れ英國が外國輸入品に對して支拂をなせる重要な唯一の財源なりとす、英國は此の工業輸出品なくば、到底其巨大なる食品の輸入を外國より仰ぐことを得ず、縦し輸入し得べしとするも、其負債を還償し得るの道なき也、而して英國より外國に輸出すべき工業の輸出品の總額は、再輸出品を除きて、毎年二億二千五百万磅に達せり。

幸にして現今各國に於てコルベールの商業政策を用ゐるものなしと雖も、若し各國爭て極端なる保護政策を用ゐるに至らば、英國の輸出品は隨て減少せざるを得ざるに至るべし。

願ふは英國工業の危險は此よりあり、今日の時勢固よりコルベール主義の再燃認む可かを



らずとも、各國財政の目的より、或は保護主義の見地より、未だ全く關稅を廢除せ  
 る獨立國はあらず、況んや近年、歐洲大陸諸國、米洲大陸、英國殖民地等は頻りに關  
 稅論を唱道し、稅率を重加するの形跡多きに於てをや、例へば濠洲植民地の關稅案の  
 如き加奈陀聯邦の關稅案の如き、若しくは米國のデングレー關稅案の如き、皆此の氣  
 焰を高めざるはなし而して是等の各國の政策は、明かき英國の工業に打撃を與ふるも  
 のにして、若し吾人をして極端論を云はしむれば、各國盡く獨立せる立法權を有し自  
 由の關稅を増加し、廉價なる英國品の輸入を禁止するに至れば、英國は自然に傾倒す  
 るに至る可し、是れ必ずしも實行し得べき問題に非ずと雖も各國が財政收入の目的に  
 せよ將た自國工業の獎勵の爲めにせよ、多少なりとも關稅を増加するに於ては、英國の  
 工業は是れが爲めに、影響を蒙らざるは稀あり、蓋し英國の富は輸出の増加と共に増  
 し、輸出の減少と共に減ずるものなれば也。

獨立の植民地は自由に關稅を増加し得るの權あるを以て、英國は固より其市場を目的  
 として工業品の生産に従事する能はず、特に全く關係なき獨立國に於て何の憑恃すべ

き所かあらん、英國の希望は、關稅を増減し得るの權力なき國、例へば支那朝鮮其他  
 半開國の市場並に英國の權力の下に屈從せる領土の市場例へば印度亞非利加保護國の  
 如きを得るにあり故に若し英國よして一たび其市場に勢力を失ひ、或は競争者の爲に  
 其市場を奪はるゝに至り、或は他國に輸入すべき英國工業品に甚だしく課稅せらるゝ  
 に至らば、英國工業の衰運に傾くとは謂はずとも明かなり、之を要すに英國現時の經濟  
 的地位は、全く其外國に有せる領土(市場)の上に建設せらるゝものにして、英國に於  
 ける人民は勞力者の地位に立ちて、海外万里の征服者、植民者は、英國雜貨物の消費者  
 にして失ふ可からざる花主なりとす。

苟も英國人民にして斯の經濟的眞地位を忘却するの時は即ち其勢力の絶頂より墜落し  
 來るの時なり、英國人民は克く自己の立てる地盤を了解せるが故に、汲々として軍備を  
 擴張し、其勢威を誇大にし、其勢力を弱國の上に及ぼして、市場を開發專領し、或は  
 機に應じ變に處して其疆土を蠶食し或は蠻民を驅逐して荒野を侵畧し以て自家の植民  
 地を造る其行ふ所一として市場を擴張開發して、國內の勞力者を養ひ其製造品を消費



するの地を成さんとするの方針に出でざるはなし。

是の如く英國今日の盛大を致したる大原因は、直に今日に於て英國が其國勢を維持するに甚だ困難を感じる最大原因たり、一方には英國が其經濟上の地位を保持するの容易ならざるものあると同時に自治植民地統一の策は、久しく英國政治家の頭腦を痛ましめたるにも係はらず未だ其効を收むる能はず、而して英國の繁榮は既に久しく世界強國の猜忌嫉妬を招き、内憂外患交々到るの有様なれば英國人民は決して高枕安眠を貪ぼり得べきの秋に非ず、即ち高枕安眠し得べきの秋に非ざるを知るが故に、英國の朝野官民を問はず國を傾けて、外に應じ内に處するの策を講せざるはなし、吉凶禍福、事變の生ずる毎、常に必ず内は英帝國の存在を維持し、外は列國の猜忌嫉妬を排壓するの方便を考究せざんばならず、英國の朝野共に殆ど天性的に此の問題を解釋せんと努めざるはなきが如し。

英女王六十年平和の治績に於ける文明の進歩、國富の發達、政治の改善、算し來れば一として英國人民の歡喜と感謝を招かざるものはあらじ、英國人民が女王の御宇の千

代万代に長かれかしと祈らぬものもなく、之が爲に幾億の資財を散じて、其文運武運の長久を祝し、出來得べきあらゆる豪華と莊嚴とを以て女王の眉壽景福を粉飾し、歡天喜地、手の舞足の踏を知らざるに至りしも吾人は深く之を怪まず。

是の如き國民的感激の際に處しても、尙且つ英國の朝野は、其苦勞性を失ふ能はず、内は英帝國の存在を維持し、外は列國の猜忌嫉妬を排壓せんとするの外一點の望みなかりしなり、此の一點こそ即ち女王六十年大祭の最大眼目にして、英國民が痲痺忘却する能はざる處のものなり、即ち女王六十年大祭の根柢に横はれる眞原因に二あり。

- (一) 列國に對する示威的
- (二) 植民地の統一策

請ふ少しく之を述べんか、

往昔核撤兵を四疆に出し、八荒を併呑して万邦を征服し、而して其國都羅馬に凱歌するや、王侯將相を捕虜として鹵簿を壯にし掠奪せる巨万の錦繡綺羅、金銀、寶石を以て其車駕を粉飾し、勢威堂々として羅馬の市民を壓倒し、武勳灼々として万國人民を震慄せ



しめたりき、吾人來て英國六十年の大祭に遭遇し其莊嚴の外飾を看る一として是れ彼の核撒の故智を襲ふものに非らざるはなし、女王の車駕セント、ポールの寺院に入らんとして、英京の街道を一週するや、三十有餘の列國帝王代表者は十有二の各植民地の大宰相と共に其車前に趨從して以て女王の莊嚴を飾れり、蘇國の義勇團を初めとして印度土人に依て編成せられたる軍隊、亞非利加の黒人に依て編成せられたる軍隊支那人に依て編成せられたる軍隊、其他各植民地より派遣せられたる軍隊は、英國人民が誇りて以て英帝國を防衛する名譽ある軍隊なりと稱するも、其實は羅馬時代に於ける俘虜奴隸の性質を脱する能はざるものよして、遠く海外萬里の波濤を渡り、英京に來り女王の車駕の前後を擁して以て其未曾有の大祭禮を粉飾するの一玩具たるに過ぎざりき、然れども英國の目的は、其富彊殷盛を快とせざる歐米列國に對して、其領土の廣大なるを示し植民地の旺盛なるを誇り、尙且其宏濶なる領土植民地を防禦せるの術に於て盡さるる所なければ、英國の隆盛決して偶然の故に非らざるを明かにし、藉て以て列國が富彊を以て英國と争はんとするの無益の徒勞に屬するを表示せんとするにあるなり、

殊に其海軍大演習の如き、陸軍大演習の如き、其目的世界万国、英國の富彊を忌み其隆盛を嫉み、其露隙に乗せんとせる野心ある國民に對する示威的運動に出でざるはなし、是の故に六十年大祭を論評する各國の新聞を看るに、英國に對して國際上の禮法よりして義理一片の諛辭を述べたるものは之ありと雖も、衷心より英國の隆盛を慶賀せしもの未だ之のらざるなり、特に露佛獨の如き諸國は於て、英國六十年大祭の盛觀は更に甚だしく平生の嫉妬を増長せしめたるの跡多きを看る也、蓋し英國は諸國の嫉妬猜忌深きを知るが故に、殊更其富彊の外觀を大にし以て列國に示さんとし、而して列國は其力及ばざるが故に黙して英人の雄飛を忍ぶと雖も、機に乗して英國の隆鼻を挫き、又英國が蹙躓するを看ると彼等諸國の心中甚だ愉快に感ずるものなるも似たり。

歐洲の中原に立て「威嚴ある孤立」なる辭を冠りて得意なりし英國は、將來益々威嚴ある孤立を以て満足せざる可からざる地位に立てり、然れども如何にして英國は將來永く其威嚴ある孤立の地位を維持するを得べきか、威嚴ある孤立は英國の勢力迫かに他の同盟に値するの時に於て之を謂ふべけれ、若し一朝英國の富彊他の反對同盟の



勢力に如ざるが如き場合あるに至ては、威嚴ある孤立も遂に維持す可からざるを奈何せん。故に威嚴ある孤立てふ言辭は甚だ妙なりと雖も、又頗る困難なる意味を包含せるを思はざる可からず是れ英國が孜孜として威嚴ある孤立の地位を維持せんと力むる所以にして、植民地の統一策は即ち其最大眼目たり、英國植民の性質並に種類に就ては既に論じたるが如く、苟も植民の名を附するものを擧げて、英國の版圖となさば、宇内復た英國の如き廣大なる領土を有するものあらざるべし然れども其名は英國植民地屬地にして、其實は英國より獨立せる植民地極めて多し、即ち自治的植民地にして、加奈陀の如き、濠洲大陸諸植民地の如き、ニュージールランドの如き、デーブコロニーの如き皆是なり、是等の諸自治的植民地は、各々其立法院を有し以て英國の商品に課税すべく英國の法律精神に違反する法律をさへ制定し得るの權利あり、其名は屬地たりと雖も其實は獨立國たり、英國は此れに依て物質的を得べき利益殆ど無しと謂ふも可なり、既而事あるに於て獨立國たるが故に、是等の植民地と母國たる英國との關係を連結せるは唯だ感情の力あるのみ、若し感情の力消滅するに至らば、何ぞ知らん、是等の植民

地は一躍して全然名實共に獨立國たるの機を握まるざるを、英國は是等の自治的植民地を有するか故に經濟上著るしき利益を享くるものに非ずと雖も少くとも其尨大なる自治的植民を有すると謂ふ名義は、英國の勢力に著大なる斤量を與ふるものたるは疑ふ可からず、然らば即ち英國の存立よりして、又其今日の勢力と地位とを維持する點よりして、自治的植民地の散漫を統一して、其の名目丈も英國の屬國たらしめ、若し能ふ可くんば、是等の自治的植民地を經濟的に其母國と統合して利益の點より分離すべからざるものたらしめんとして、苦心經營するは決して怪しむ足らざるなり。

此を以て女皇六十年の大祭に際して、十有一の自治的植民地の宰相の來朝して、女皇の祝典に趨陪するも、實は自治的植民地の統一を謀らんと欲する意に外ならず、是等の植民地の宰相は、各々其植民地を代表するものにして、ロリニー氏は加奈陀聯邦を代表し、レワード氏は新サウス、ウエールズを代表し、シドン氏はニュージールランドを代表し、ブラッドン氏はタスマニヤを代表し、タルナー氏はビクトリアを代表し、其他スプリング氏、ホレスト氏、キルソン氏、キングストン氏、ブラッドン氏、エヌコム



ブ氏皆其自治植民地を代表するものたり、六十年大祭の一大眼目は其自治植民地を母國に統一せんとするにあり(第一)には感情の勢力に依て、(第二)には利益の交換に依てなりされば十有一個強大なる自治的植民地の大宰相にして、而かも其自治國を代表せる十一名の人士が英國に著するや、英國人民は歡噪狂する如く万歳を唱へて之を迎へ、女王は優待隆遇倒らざる所なく殆ど國を傾けて之が響應に従事し、夜を以て日に繼ぎ、彼等をして陶然頽然として遊蕩行樂の間に醉死せしめんとする觀ありき、抑々英國が朝野共に植民地の宰相を遇する是の如く厚き所以のもの決して偶然ならんや、其期待する所甚だ深く且切なれば也、其れ是の如く英國は汲々乎として植民地の歡心と求め、感情を温め以て帝國の統一、植民地の離畔を調和せんと力めつゝあり、然れども英帝國の統一、植民地合同問題は、頗る難事に属し、未だ之が良策として見るべきものならず、徒らに彌縫姑息一時を糊塗するの小術數に過ぎざるが如し、植民地諸邦も亦た良籌徹猷の能く植民地の統一を圖るなく、荏苒久しきに亘らんには終に各植民地は全く英國より分立するに至る可きを豫言せざるものなし。

加奈陀聯邦の宰相として代表者たるロリエー氏が六十年祭中植民地の爲に盛醺を張り其の席上よ於て演説せし所を聞くに曰く若し、加奈陀にして獨立を欲したりとせば、何時にても英國を離れて獨立し得べかりしなり、然れども敢て其の獨立を望まざりしは、蓋し加奈陀は既に實際に於て獨立國たるが故なり、云々と又同氏は英國を去て佛國に來り一場の演説をなして曰く(渠は加奈陀よ於ける佛人の子孫なり)將來加奈陀は果して英國の一屬地にして留るや、將た全く英國の主權を脱却するや未だ容易と知る可からず云々と、彼が英國に於て説きし所と、佛國に於て説きし所と照合し來り是を以て加奈陀人民が英國に對する感情の一斑を示すものなりとせば兩國の關係は甚だ微弱なるを思はずんば非らず、宰相ロリエー氏は今日英國と植民地の統一は唯々植民地の代議士をしてウエスミニスターの國會に出席せしむるにあるのみ、然らずんば全然英國と植民地との分離獨立あるのみ、區々たる感情の力は長く母國と植民地との關係を繼續し得べきもの非すとせり、濠洲南ウエールズの宰相レード氏は曰く、濠洲人は我儘勝手を好む人民にして、此の人民を處するには、自由勝手に放任して其欲する所



を成さしむるのみ、若し濠洲人をして其爲すが儘に爲さしめ欲するが儘に行動せしめば彼等は常に母國(英國)を愛せん、若し然らず分たりとも英國が其の母國の權に藉り干渉する所あらんか兩國の關係は忽に此に絶滅せん云々此の言たる英國は濠洲南ウエールスを以て獨立國たらしむべしと云ふに異らず、英國に對する濠洲人民の意向畧々窺ふべきなり。

ニエーシーランドの宰相シドン氏は説をなして曰く、英國は植民地を對するに更み心腹を啓て事を議せざる可からず、我が植民地は濠洲警備艦隊の爲めに、多く其經費を投じたるに非ずや、既ら然らば濠洲植民地は、多少帝國の政治に隊を容るの權なかる可からず、而して我植民地の目的は純然たる自治國たるにありて、英國との關係は植民地の代表者を以て之を維持するを得る事となさざる可からず、云々、ビクトリアの宰相ターナー氏は英國と植民地との經濟上の關係に付て述て曰く、ビクトリアは外國輸入品に重税を課する保護税國たり、是れ一切外國品に課税するものにして、母國たる英國の輸入品と雖も勢免る能はず、ビクトリアは英國と同植民地との情誼を厚くせんが

爲めに保護税を廢する能はず、且つや關稅の收入は毎年二百万磅に達するを以て政府財政の一大財源にして税率を減じて以て財政の基礎を薄弱にするが若きは之を避けざる可からず、况や我が製造工業未だ全く保護税を廢するの時節に到着せざるのみならず反つて倍々税率を増加して以て外國輸入品の競争を壓せざる可からざる事情あるをや云々、是れ輓近加奈陀の取りし政策にして、現今植民地の一般の意向として見るべし、此に由て之を觀れば如何に英國の植民地が、其母國たる英國の利害に顧念せず、却て英國の利益を剝減すべき商略を用ひつゝあるかを知るに足らん。

既に英國の輸入品に重税を課して、以て内地の産業を保護し、或は自由勝手に自治を行はんとするが如きに至てはロリエーが所謂其名は英國の主權を認むと雖も其實は既に一個純然たる獨立國たるものなり英國は如何よして此の自治的植民地に對せんとするか、吾人の見る所を以てすれば今日に處する策唯三あり。

(第一策)全然英帝國の組織を革新して自治的植民地の代議士をしてウエストミニス

ターの議院に列せしめ植民地を以て英帝國の一州區となし植民地と母國と



の總合統一を計るにあり。

(第二策) 斷然植民地の自治獨立を認定し而して後等植民地との同盟を形成するにあり。

(第三策) 植民統一の策を定めず倫安姑息を以て事に従ひ、唯植民地は母國の屬邦たる名を以て満足(敢て是よりして苦むしき利益を收る能はざるに係らず)するにあり。

英國が其自治的植民地を對する策蓋し以上の三策を過ぎず、而して今日英政府の對植民政策を見るに汲々乎として一時を彌縫するに止まり、曠日彌久猶ほ一定の大策を建てざるものに似たり、然れども早晚一決せざる可からざるの運命を有するものにして女王六十年祭に於ける各植民地代表者の會合は蓋し其一階段として看るを得べきか。アングロサクソン人種が世界未決の問題を解釋を與ふ所のものは此の問題なり、世界の人種が之に依て學ぶべき處も亦た此の問題なり、而して植民地統一の成否は實に英國死活の問題たるを忘却す可からず。

### 英國海軍大演習に於ける富士艦

海軍大演習は、英王六十年金剛祭典壯觀中の最も壯觀を極めたるものにして、殆ど祭典の中堅と云ふべく、此盛舉を見て初めて金剛祭の金剛祭たる所以を認るを得たり。英國が海上權力の主權者として、勇風一代を推倒するの實、其海軍の盛大なるに基因するを知らば、其六十年金剛祭に於ける海軍大演習の、如何に壯嚴勇大なるを推知するに難からざるべし。六十年金剛祭典の行列は、六月廿二日に英京倫敦に於て執行せられたり、さなきだに世界最大一の大都城には、地球の隅より隅に至る迄の、あらゆる人種は此の都に流れ入りて、二千餘萬の人類は此の煙の都に集りて、債の大帝都も立錫の餘地たもなかりき。其壯觀驚くに堪へたりと雖も、然かも其帝國の實力を示すに至ては未だし、而して吾海軍大演習に臨て初めて其然る所以を見たり。

金剛祭行列の後四日經て、即ち六月廿六日スピッド英國海軍要港に於て海軍大演習は催されたり。全英國舉て狂するが如し。演習の數日前より、各地より見物人は流れ



來りて、スピシーアの港に集れり、吾れ此の千歳一遇の壯觀を目撃せんとして、數千里を遠しとせずして此の國に來る、此の盛事觀ざる可からず。

各國政府は各其特色ある軍艦を派遣して、此大演習に列せしめ、其海軍力を代表せしめたり。幸亦かな我が新製造の富士艦は、其恐るべき戰鬪力と、壯嚴勇大の風采を以て、極東の日本帝國を代表して、此の古今未曾有の盛觀に列せり。スピシーア港上幾多の艦艦の中、マストの上に旭日旗を翻せる富士艦を遠望したるものは、誰か亦其國民に向て一片畏敬の念を生ぜざるものあらんや、嗚呼海軍なるかな、海軍なるかな。英國海軍大演習見物の爲め、余は富士艦より案内を受けたり。軍艦より然かも壯嚴なる富士艦の上より、此大演習を觀測するを得るの便宜を得たるは幸甚にてありき。

偕て演習の當時、朝流車に乗じて、スピシーア港に來る心算なりしも、第一列車の時間を失して遂に第二列車に乗じて、倫敦を去れり。倫敦とス港との間は始と三時の行程にあり。既にして余が軍港に着せし。頃には天候頗る悪く驟雨沛然として至り、光景凄まじかりき。ス港の停車場に至り馬車に乗して直ちに波止場に至りじ頃は、雨少

しく止みたれども、海上の景色頗る物凄く風益々暴く、天愈々黒し。港上には無数の軍艦を以て充滿し、眼光の達する處、艦艦を見ざるはなし。

余は波止場に幾多の見物人と停立して之を眺めたりしが、余が目指す富士艦は陸を隔る數哩の外にあり。如何にして余は富士艦に達せん乎。黒雲は天に漲り、狂風は波濤を噪がし、如何ともすべからず。水夫を招きてパテラを指し、余を日本富士艦へ送るや否やを尋ねれば、彼は港内浪高く進むべからすと答へり。強て余を送れと問へば、十五シリング（凡う我七圓五十錢）の漕代を與へよと云ふ價の高きは厭ふ所に非らざるも、片々たる一葉のパテラ到底怒濤を蹴へて宿命をの船に達する事叶はざるべしと感したれば是は思ひ止りたり。

さればとて我富士艦へは如何にして達せん乎。吾れ鳥も非ず、飛ぶ可からず、吾れ魚に非ず遊ぶ可からず。然れども我宿命の船には是非とも行きたし、途なきを如何せん、茫然と波止場の上に恨めしく海上を眺めて立てり。

遙の海上に一艘の軍艦用小蒸汽船は、波を蹴立て、吾が立つ波止場を差して進み來る



を認めぬ。次第に陸に近づくを見れば確かに亞米利加の國旗を樹てり。一人の年若き少年士官は、舳先さよ立てり。渠は米國軍艦の客を陸に送り來りし也。我も謀あり、彼小蒸汽の波止場に着くや否や、余は進みて刺を彼の少年士官に呈し、余今我日東の艦士艦に幸らんとし不幸にして風強く浪高く行くに途なし、失望之に過ぎたるはなし、吾れ克く米人は義侠の民なるを知る、敢て足下に依て余が萬願を達するを得ば幸甚也、少年士官曰く、諾、即ち直に余は米國軍艦の小蒸汽船を投ず。船は既に陸を去る數間。余を乗せたる小蒸汽船は、整列せる英國軍艦の間を縫ふて港内深く進み行けり。余は暫く彼の年少士官の室内に談笑せる間に、電光雷鳴、風は益々強く、浪は愈々高く雨降る事瀧の如く、呎尺を辨す可からず。恐るべき凄まじき光景を呈し來れり、闇の如き雷雨の裡を突進せること、凡十五分、少年士官余に告て曰く、如是、雷雨進むべからず、暫く米國軍艦に來りて休息せらるべしと、やがて、小蒸汽船は、龐大なる白色の塗られたる一軍艦の横を着きたり。是れぞ米國海軍を代表して、海軍大演習に列し、港内一種の光采を發揮せる米國巡洋艦ブルクリンにてありき。

圖らざりき米國小蒸汽船に救はれて、途すがら雷雨に打たれ、又米國軍艦に我が隠れ家を見んとは。云はるゝまゝに、小蒸汽を出で、本艦に移り、沛雨の下を去りて艦内に入れり。此僅かに數分間に、濡れ鼠の如くなりて、上衣絹帽子も雨に打たれて見る影もなし。艦に入りし時には破船したる舟子の波を漂ふて陸に上りし心地せられたり。

艦内士官の親切丁寧一方ならず、殊に同艦の航長は余を其船室に伴ひ行き、余が外衣帽子を取り、氏か海軍々服を余に貸與し、ボーイをして酒を命して持ち來らしめぬ。其内に七八名の艦内の長老士官は、室に集り來りて、共に杯を擧げて健康を祝せり。余は米國士官の親切厚情、言語に盡し難きを謝し、日米兩國交情の永へに絶わさるを望み、米國海軍の萬歳、同艦士官の萬歳を唱へり。一同皆な思ひ懸けなき絶東の珍客の來りしを喜ぶ旨を述べ、時正に七時晚餐の用意は既に成れり、一等士官は余を催して食堂に來り、氏の右側に坐せしめて、勝手に遠慮なく晚餐を喫せらるべしと云はれたり。是れ又思ひ寄らざるの米人の厚意なり。此の日は大演習夜景を看んとて此の艦に來遊



せし米國の紳士淑女も多かりき。山海の珍味、三鞭の美酒、米人の厚意を感ずると同時、陶然として酔はんとする頃、海軍樂隊は樂を奏し初めたり。

食後同艦の提督を訪ひ、談數刻、余が享けたる厚意を深謝して別る。別るゝに臨みて、同軍艦は余の爲めに、同艦の救命船を下し、七人の米國水夫をして櫂を漕かしめ、余を日本軍艦富士に送らしめられたり。一等士官は余が外衣の未だ乾かざるの故を以て氏の軍服、并に軍帽を貸與せられたり。余は是れにて宛然たる一個の米國海軍士官となりぬ。

雨は止みたり、日は暮れんとす、余を乗せたる米國海軍の七人の水夫は露、佛、伊、埃、獨、典諸國の代表軍艦を横切りて、我が日本軍艦富士に達せり。唯見る勇風堂々たる艦體、海を厭して百尺高く、慾目よは非らざるも、歐洲列國の軍艦中、日本富士に及ぶものなし。願くは此の東洋の重鎮として帝國をして萬々歳に安からしめよ。

日本軍艦に上りて刺を通し、三浦艦長に面晤を求めり。某士官は懇切に余を引て艦長の前に來り時正に艦長内外の諸客を饗し、歡談園なるの頃なりき、余が三浦艦長の

名を聞く既に久し。氏が航海術に於て争う可からざる材幹と熟練とは、既に天下の知る處たり。左れば氏が日本海軍の大黒柱、日本海軍史上、前代未聞の大戦闘艦の艦長たるの光榮を擔ふに至りたるは、敢て怪むに足らず。夜既に九時。英國海軍并に各國軍艦盡く、隈なく電燈を點じ、海上宛然幾千の噴火山を築き出せるに異ならず。天公亦將又十九世紀電氣時代の豪華と莊嚴に驚くなるべし。當夜の火飾の盛なる、能く筆紙に盡くす處に非ず。我富士艦の火飾は白、赤、青、等の電光に配合を施し、一際目立ちて面白く、所謂萬綠叢中の一紅點とも評すべきか。

既にして海上戦艦は、各々廿一發の祝砲を發して英皇六十年金剛祭を施行せり。滿港の諸砲艦、一齊に祝砲を發するが故よ、其響万雷の一時に起るか如く、天に振ひ海に轟き、其凄まじき様は、宛然として戦闘艦上に、世界の最大海戦を観るの思ひありき。砲聲停みて音樂を奏する音は、諸艦に響き各所に喝采の聲雷の如く聞ゆるは、各水師提督の英國軍艦を見舞ふか爲めと知られたり。

我富士艦の水兵は、甲板に整列して海軍々歌を奏して勇まし。



在英日本の紳士、富士艦を招かれて來りたるもの多し。諸客其英國海軍の壯觀を目撃して余輩と共に無量の感慨に打たれたるもの多きを知れり。余は獨り靜かに富士艦の巨砲の下に佇立して、古今を默想し、天地に俯仰し、海上の大王として英民が坤上を雄飛するの所以の實を考へ、萬感泉の如く涌き起るの時忽ち余の名を呼ひ、耀々たる幾萬の電燈球を以て火飾せられたる、英國海軍の一行を指して曰く、日本海軍の全力を集むるも猶は彼の一行の戦闘力を有せず、君以て如何となすと、余答ふるの辭なし、答ふるものは誰ぞ、富士艦の航海長坂本氏也。

戸絶東の帝國、遂に又英國を學ぶ能はざる乎。此夜は三浦艦長其他諸氏の懇切なる優遇を享け、廣々したる、富士艦の客室の温かあるソアの上を横臥して、夜を明し翌朝々食を喫して、少年士官の案内にて、艦内を縦覽し、九時余は三浦艦長に別を告げて陸より迎ひに來りし汽船に乗じ、萬歳を唱へて、富士艦を去れり。海軍士官、海行かば泳ぐ屍と唱破せる、海上の勇士、渠等のスイート、ホームも波の上にあり。渠等の名譽ある墳墓も、波の上にあり。天眞燦爛、光風霽月は實に渠等の

心事なり。噫樂しきは渠等の生涯なる哉。

多謝す、富士の海軍士官、并に水兵、樂しき且つ驚くべき我生涯の一夜をその波上の金城に平和よ過せしを。多謝す、米國軍艦ブルクリンの海軍士官、吾が享けし其日の厚き歡待と温き友情を。



米風歐雲錄 終























國民同盟會編纂

**國民同盟會始末**

近衛公爵會保密書入 正價金卅五錢 遞送費金四錢  
 (一)朝鮮出兵 (二)平和克復 (三)日露對抗  
 (四)支那保全 (五)英獨協商 (六)東洋經濟  
 (七)占領問題 (八)滿洲開放 (九)第一露清特約  
 (十)清帝回國 (十一)日英同盟 (十二)日米親善  
 (十三)撤兵條約

是れ國民同盟會の最近外交問題に對し如何なる事功を擧げたるかを叙せる活歴史なり最近の外交史を知らむとするものは須らく本書を讀め本書は實に最近外交史の一部たり希くは全國同盟會員諸君は勿論朝野志士の必讀を煩はず

司法大臣 清浦圭吾君題字 第三版  
 大審院圖書係 大野太衛君編纂

**大審院判例要旨大全**

帝國大法 附屬法令類  
 甲、民事集 乙、刑事集 紙數一四八六頁  
 一冊各壹圓五拾錢  
 一、二版賣切、三版發行ニ付特別減價甲、乙金貳圓  
 一冊金壹圓廿錢(遞送料ハ別ニ可申受候)

名譽大博士 鳩山和夫君 松本三郎君 弘君著

**漁業法要論**

附錄 定價金三拾五錢  
 漁業法 重要事項 全行規則 其他關係法規 重要物産  
 然ルニ我國重要産業ノ一ニシテ將來最モ有勢ナル漁業ナリ  
 シハ夙ニ識者ノ憂慮セシ處ナリシカ今ヤ實地ノ慣習相局シ  
 カラズ且ツ先例ノ改メテ極メテナキテ以テ之ヲ運用スルニ  
 當リ多少ノ疑義論ヲ生ズルハ極メテナキヲ保セス故ニ新業ノ  
 爲メ見アリ之ヲ公釋シタルハ極メテナキヲ保セス故ニ新業ノ  
 業法ニ意ヲ注シタルニシテ本モハ習慣法ニシテ行政司法  
 斯業者必携ヘサルハカラサルモノナリ  
 右ニ備ヘサルハカラサルモノナリ

**高等商業學會編纂**

全部十二冊 菊判美製 各正價卅錢 郵稅金六錢  
 第一編 記帳簿 商業作文 第四編 最新商業簿記  
 第二編 最新商業經濟 第五編 商業地理  
 第三編 最新商業實務 第六編 最新商業算術

96  
 167



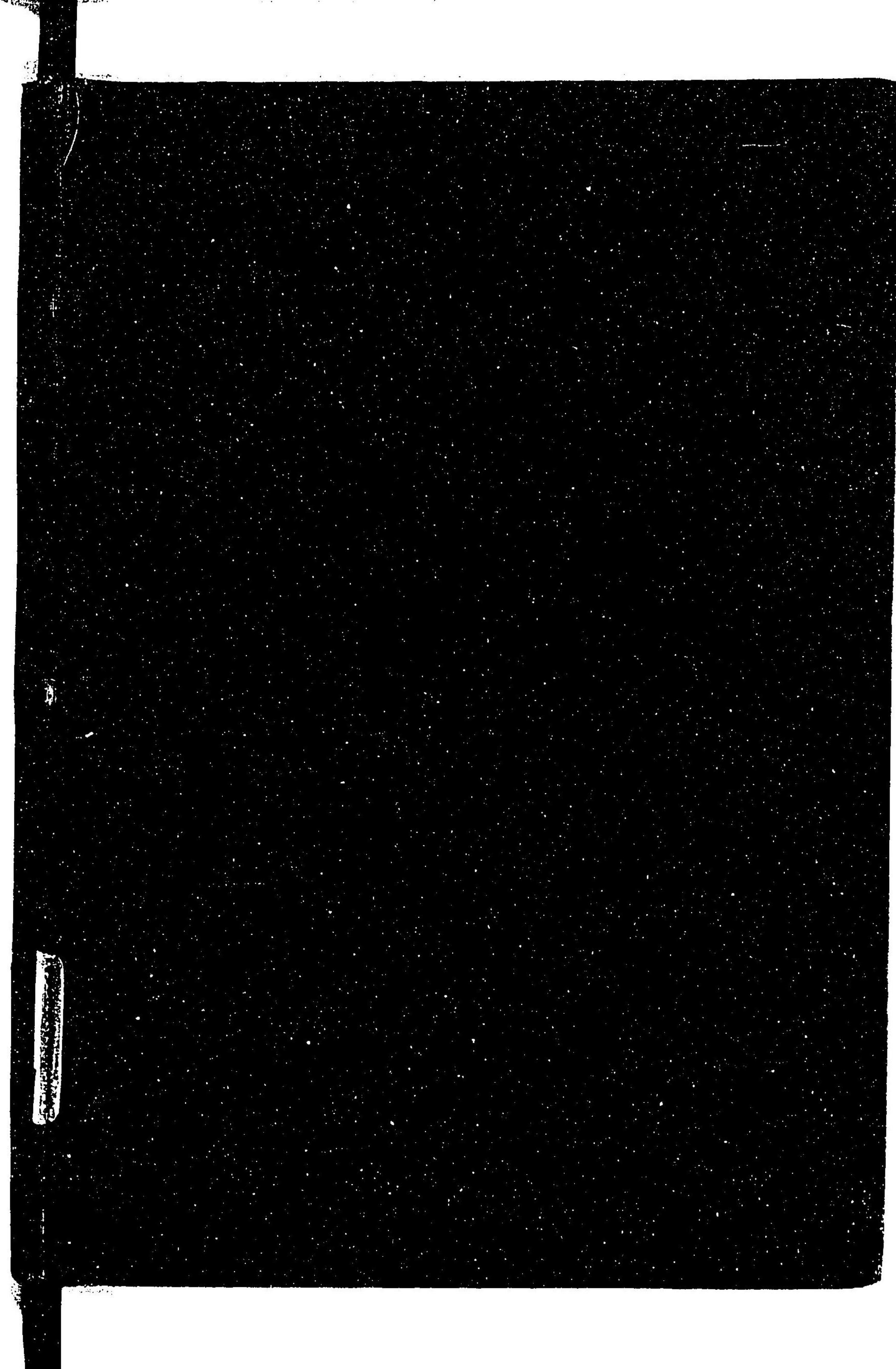


29



96
167







96  
167

M

026956-000-9

96-167

米風欧雲録

松本 君平 / 著

M36

ADG-0081





